古史傳

自第四十八段
至第五十一段

十

歷和第三号

和書門
類 号 函 架 冊
四二五一八 一三一 一一 四〇

内閣文庫
和書
類 号 冊 架 函
四二五一八 四 一六 四

内閣文庫
番號 和 42518
冊數 40(13)
函號 140 185

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

古史傳十上卷

平篤胤謹撰
男　鐵胤
孫　延胤　續攷

神代中二上卷

カミヨノナカツマキ　スメラミコトニキトイフマキ

爾科天日鷲命而。種穀木。令作白和幣。科長白羽命而。種麻。令作青和幣。是穀木麻。並於天羽一夜蕃茂矣。

槌雄命。令織文布。所謂荒衣是也。亦謂敷和衣。即宇都波多是也。以天御桙命爲司。以天八千千比賣命。亦名天棚機比賣命爲織女而令織神衣矣。所謂和衣是也。是者神衣祭出縁也。

天日鷲命。長白羽命。天羽槌雄命。天御桙命。此おとむ。下ふ委く云べし。○穀木と和名抄ふ。穀加知木。名也を云ひ。字鏡ふも。穀楮也。加知乃木と。今世よ。加宇豆乃木と云む。音便の訛なり。○麻ハ和名抄ふ。麻和名乎一云阿佐。臬屬也。臬和名介無之。麻有子名也。苧和名加良無之。麻屬白而細者也。まと卷子。閉蘓續麻圓卷名也。今云。腑ふ似とる故よ名ぢくはう。○白和幣。青和幣。神代紀ふ。和幣此云尼枳底と。古語拾遺よも。和幣古語尓伎底とあり。師云。弓む多閉の約ひとる。言ふて。即爾岐多閉ふ。爾岐む。即和字ひ義。まと熟字をも訓ひ。多閉ハ縣居大人說よ。絹布の類を總云ふ名ぢ。ゆとゐのめ。此こと冠辭考。白多閉の條よ見も。まと此次よも云り。

絹の切を佐伊豆と云て、裂多閇あり。また俗よいふ古手は、古多閇あり、こまらこそ、多閇を約免て氏と云例ぞ。

さきだ幣字を書て、神に奉る方に付てのおきを以て、此物の本義に非ず。今云幣字を書てしハ、字書に、帛也、賦也、又銭也などあるに依て、用ふるからむ。

ちて麻は、穀に比きだ、稍青紀故に、青和幣と云ひ、穀て麻に比ぶきバ、白き故に、白和幣と云ル也。ちて古語拾遺に、穀木を殖て、白和幣を作るとし云る處に、是木綿也と見え侍。まと神武天皇段に、穀木所生、故謂之結城、を見え、宝基本記に、謂以穀木作之白和幣、名号木綿、と見也。

かゝきだ白爾岐氏は、木綿のおと、木綿て穀木皮以て織れる布に、古て布乃祢く用と侍し物に侍。此を布に侍ることと、漢籍にも見えと侍。扨布に、せし事て、いと古のおとに、て稍降侍

てハ、あゝ紙に、のみして、布に爲るおとて絶とりと見也。

其て和名抄にも、穀紙て見えて、布の事ハ見えざるに、て知べし。ちて由布に、木綿字を用ふるおとて、杜仲の一名を取きる也。其て和名抄、木部に、本草注云、杜仲一名、木絲、折之多白絲者也、和名、波比末由美、と見え、また祭祀具に、本草注云、木棉、折之多白絲者也、和名由布と見侍。

ちきだ此て、穀を杜仲と思ひ誤きるに、て、實に杜仲を用と、流ふハ非ず。然らだ和名抄にも、祭祀具に、て、穀を挙て、和名由布と記べき事あるに、木綿を挙ざるて、世に普く用る字を出せるのみにて、実に杜仲ありとゆるに、て非ず、故に同本草注て説を引あゞら、彼処に、て杜仲の字を、波比麻由美の名を、挙ぶ、其て別に、木部に、出せり、それらみ既に、杜仲をバ、由布に、て用ざりしおと知べし。○また杜仲の外に、木綿と云、木大小二種あり、其小きて、近世に弘まきる、紀和多のこをあり、大きるも共に、実の中に、白綿にるを採て、布にゆる物れり、然れバ此らも由布と、て甚く異あり、字て同じき以

て。おもひ混ふべゝらば。ちて穀木皮以て織れる布也。殊ふ白き物ふる故ふ。白由布とも。白爾岐氏とも。白多閉とも云ル也。古哥あどよ。白多閉を多く詠る也。もむら此布ふり。白さへの麻衣。まさ白さ冬の藤ふども有まど。其也さるさろれ事ル也。扨豊後風土記ふ。速見郡柚富郷。此郷之中。楮樹多生常。取楮皮以造木綿因曰柚富郷。とゐるふ依れど。古書ふ。楮機。楮衾。楮繩。楮領巾ル也を多くあふ楮も。穀木と同物ふ也。故万葉よ。白楮ともろき。はさ万の白き物よ。楮衾。楮角乃ふど。枕詞ふも云り。角も綱ふりと師も云れ。或人も。楮布ル也りと云ゆ。さて楮。字ハ。楮を草書を也誤り也ら也。と師も云まゆまど。楮。字を書る例ふれまバいろ〳〵。此也ふ布ル也よ和字ふらむ。ちて書紀ふ。下枝懸以天日鷲所作木綿と云る。古事記ふ於下枝取垂白丹寸手。青丹寸手。而。とゐふを

を合せて思ふよ。書紀ふ。木綿とのみ言れど。白和幣のみふもゐらで。必青和幣も具ふ法れれど。如此云と也も。穀と麻と二種を凡て也。木綿と云ゐりと見也。ふ布式ル也を。其料物を舉さる所ふ也。木綿と麻を出せるふ。其を用ふる所よも。唯木綿のよを也み云て。麻の事も見えぬ。ゲ多也も。二種を合せて。木綿と稱ふ故ふりけ也。凡て榊よ木綿を付。ふど云。るも。二種よ合せての名ふり。ちて白和幣。青和幣。共ふ織さる布也も云ひ。万葉よ。木綿疊手向ふどゐまさ未織也せで。ふる也。必織さる布と聞也。ふ糸ふ爲さ依儘ふ爲ふを也用さ也と見也。故古書ふ。木綿を也作と云て。作と書て。波具と也。織を也は云也ば。もし布ふらバ。倭文

織おどの如く。織と有べき事あり。はと式外どふ。布若干端。木綿若干斤。麻若干斤と。布の外ふ舉げ。端おぎゝは無くて行とのるも。糸おぐら用ふる證おゞ。かゝれた木綿手次。木綿蔓おども。糸の仭おるべし。然れむ此時。賢木ふ垂とふも是おゆ。麻も常ふた。未織ざるを云へども。又それ布をも。同じく麻衣おど云る如く。木綿も然れり。さきむ揔名の多閉も。織と云。未織ざる通れし云べきゝ。まと神ふ手向る奴佐幣。まと幣帛。おど書く。も。絹布をも云ひ。未織ざふ木綿麻をも云ゞ。麻ゞ書た。種くの中れ一ッふ就てあり。ま○と後世ふ紙を用るた。木綿の代れゞ。○是穀木麻。並一夜蕃茂矣。おた其生茂れる事れ。いと速ゝゞし事を云ふ文ふて。一夜ばゝゞの間ふ生出し由おゆ。此時常夜往。るゝおどおゞし。昼夜の謂ふ非ざるこゞを知べし。○文布。荒衣。敷和衣。宇都波多。文布は倭文と書るも同物おゆ。倭を委と書く。た省字おり。共ふ斯栁理と訓べし。神代紀ふ倭文神此云斯図梨俄未とある図た書紀ふ上の假字ふ用とり。ツゞを訓るた非おり。和名抄ふも淡路国三原郡倭文之止利ツゞを。ありまと志豆とのみ云ることも。万葉おどふ多く見えて。下ふ引るゞ如し。まと東大寺戒壇院神名帳ふ委文大明神ふ。レツトンと仮字を添とるた。音便の訛りおり。斯豆淤理れ約れふ言ふて。其た天武天皇紀ふ倭文此云。約まる。斯豆た筋おゞ。今も東国ふて。筋をレヅといふ処く。ゞ之頭於利とのり。頭於た栁とのゞ。倭文を志豆ゞのみ云るた。此由おるべし。ちて其筋ゞゞて文おる故ふ。綾布とも云ゞゞ。さまど此文布を。アヤヌノと訓るた非おゞ。其た釋紀ふ。倭文號綾布之類歟。建久諸祭興行之時。大藏省年預申狀有青筋文之布云ゝと云ひ。常陸風土記ふ。久慈郡。静織里上古之時。織綾之機未此知

人干時此村初織因名と見え。此風土紀文殊は志摩理の綾布ある事を知るべき明文ふはと釋紀ふ。倭文神坐常陸国依之諸祭幣物内倭文者常陸国之所濟也。此文は倭文神坐常陸国と云る其社のことハ下は云べし。主計式ふ常陸国倭文三十一端と見え。おき此国をり倭文を進れる證あり其本の縁も下は云べし。新猿樂記は常陸国綾をりの事も倭文を云るふど戎合考へて斯豆淤理とも筋織の義ふて青筋の文あれ布を云こと知られと。今世は阿夜と云も絹は文ありる織木綿の類を云り志豆も穀まと麻を以て織れるふと下ふ委く云を見て知べし。ちて此字神ふ立奉れる事も上ふ引る釋紀ふ諸祭幣物内倭文と見え万葉十三卷は倭文幣を手は取持て云く。十七卷ふ

神社は底流鏡をおふと。ちてそ牙おひのこて。と有ふて灼しちて此布ハ古專と帶は用多と聞えて武烈卷は。大君の御帶ハ倭文機結び垂。と詠み。万葉三卷ふ古昔ふ有々む人の倭文もとの帶とき替て云ハ。十一卷は。いよ志へハ倭文は多帶を結垂。ハ也を詠。縣居大人云。或説は此倭文字著る故は賤き者を志豆と云といふるハ也ろし。神は献。また武烈紀哥は大君の御帶の倭文機と詠み。雄略卷の哥は。倭文纏の足座は立し。也も有を以て古も賤き物とせざりしこと知べし。賤の男。賤れ女も下男下女の意は。語の意異ふり。そも下枝を志づ枝下鞍を志づ鞍と云は。て知べし。然れど神ふ手向る事も。和衣の神衣と竝て。御帶の料ふ獻るはそ有るはぎ或人説ふ倭文機ハ帶も常陸帶と同物ゥといへり。此は然も有べし。さまど後ふも下ざはふ

て帶ふにること止あるゝ。万葉ふ。古、れ倭文たと帶と詠
み。古今集ふも。古の倭文れ苧環ふども詠ア。古の事云るふ心を著て
辨ふべしまと釋紀ふも。倭文號綾布之類歟。と見え為きど。後
ふは弘く用ひぬ事とふきめしれア。さてこそ正中御飾記ふも其物の知ゲ
さき由見えあれ。ちて所謂荒衣是也とは。徵ふ云る如く下文神衣の下ふ所謂和衣是
也。とある文ふ對へて作る文ふて。文布やゲて荒妙ふる由ふア。其た伯家
部類ふ。主上大嘗會降神御祝文と載されとる御文ふ是
朕我奉留神衣乎。弱槌雄乃織留文布。棚機姫乃所織留和
衣乃神衣登諸神達乃御心平介久。御魂懸能神物登受賜
陪止。八度拜志氐奉獻留青筋乃文布乃荒妙乃神衣。白綸

繒帛乃和妙乃神衣乎。諸神等受介幸比氐。此乃文布繒帛
乃清淨久明潔爾御魂依託利賜比氐云く。守護幸比賜陪
止。恐美恐美毛申壽。と有て。白綸繒帛長四丈廣一尺二寸。
太神宮和妙同之青筋文布長四丈廣一尺二寸。大神宮荒
妙同之と見えとゆ。此ふて文布やゲて荒妙ふるふと論
ふし。儀式ふ荒衣天井蚊屋一條長□尺弘五幅荒衣帳一條長七尺六寸弘十二帖荒衣御被一條長六尺弘三幅と
ふの。古語拾遺神武天皇處ふ。天日鷲命之孫。造木綿及麻
並織布。古語阿良多倍とあり。ちて荒といふ由た。赤曳糸もて織れ
る。和衣ふ對へて布ア。此布た。續麻を用て織ること。下ふ次く注せるを見るべし。亦謂
敷和衣。此事た。下ふ神衣祭之緣也。とある処ふ注べし。○以天御桙命爲司。此命

を司と爲とはた御衣織る事を殊ふ重みしてふ卍後ま
ゆも此時の由縁ふとりて此命の裔れ服部の群主とし
て神御衣を織る事を仕奉るおと下ふ引る書等ふ見え
とるゞ如し○天八千〻比賣命天棚機比賣命八千〻れ
意は上ふる栲幡千〻比賣の處第三十七段より云るゞ如くふ
て此れ決く彼神と同神ふ卍其れ上ふ舉ふ如く彼比
賣神の名れいを多く其これ機ふ由れはふ名ふを機織
る業より與りまる事實の見ざるれそのふ服織ませる御名
をゞかく別名を以て語傳へとはふ故ふぞ有ばき例さる餘れ神
とちよもいと多りり其れ
次〻ふ云を見て知べし

ゆ之を那と云れ例いを多し高照比賣れ哥ふ阿米那流夜淤登多那
婆多能宇那賀世流多麻能美須麻流云くとはるは此神
を思ひ寄せとる卍卍後より此神を漢籍ふいもる織女星の故事より附會せて七夕の妄說
を云れ論ふよも足らぬ事ふゞら此も哥作者ども れ漫
言いひちらふ種とふれるハ甚も煩く忌れしき事より
むされど此こを年中行事祕抄より
も見えとれゞ年久しき事ふこそ神名式ふ尾張國山田
郡ふ多奈波太神社ふ卍此を當國神名帳ふ正四位下多
奈波太天神とあゆ天野信景ゞ此神名帳の集說と云も
のふ此社れ今山田庄田播村を云より
在て天棚機姫を
祭れる由云り○神衣ふくはは加年美曾と訓べし尊辭
ふ加とはふ神ふまゞ卍卍○所謂和衣是也を れふの神衣
といふれ所謂和衣ふゆとの言ふて其れ赤引れ糸を以

て織る故ふ績麻もて織れる倭文の荒妙ふ對ヲて和と
は云ふふ正。○神衣祭之縁也。神祇令義解ヨ。神衣祭謂伊
勢神宮祭也。此神服部等齋戒潔清以參河赤引神調糸織
作御衣又麻績連等績麻以織敷和衣以供神明故曰神衣
祭也と有正。參河赤引神調糸のこと。御衣のこと。神服部敷和衣のおとも下ふ委く云べし。
等も。此ふる天御桙命ハ齋の氏人麻績連等も此ふる長
白羽命ハ齋の氏人ふるおと。下ふ見えあるゞ如くふて。
此も是時ハ因縁ふ依て。此氏人ハ專と掌ふ御祭ハ正。其
は毎年の四月九月。兩度有正。いおも十四日ハ日ふり。
其儀も。大神宮式ヨ。四月九月神衣祭。大神宮和妙衣ハ四

疋。荒妙衣八十疋。疋と云こと。截縁せずして献るおとふ
和妙荒妙を二卷ゞ卷物ふ為とる図を著して。和妙荒
妙共ヨ。麻を以て左右の卷を貫き通し。頭の方ヨて結び
合せ。木綿垠付け。細篭ふ納む。穀の長さ八寸幅八分。左右
卷合の間ふ指挾ミ納ム。左右ふ垂置く。大神宮和妙荒妙
同之とあるヨ。て知るべし。荒祭宮和妙衣十三疋。荒妙衣四十疋。荒祭宮も。
大御神の荒御魂ふ坐て。第一の摂神ふ坐ハ故ヨ共ヨ此祭ヨ頑正とるふふり。和妙衣者服部氏。
荒妙衣者麻績氏。おれ二氏人の。和妙荒妙を持分て織る明文ふ正。各自潔齋始從
祭月二日織造。至十四日供奉其儀大神宮司。禰宜内人等。
此等の職名の事も。垂仁天皇卷ふ云べし。率服織女八人。此も天八千〻比賣命の齋ふること。下
ヨ引る神名祕書ふ見さるゞ如し。竝著明衣各執玉串陳列御衣之後入大
神宮司宣祝詞。ふの祝詞も下ヨ注べし。訖共再拜兩段詣荒祭宮供御

衣如大神宮儀と見ゆ。内宮儀式に神服織女八人神麻続織女八人著明衣皆悉給玉串郎行列参入郎宮司常例告刀申畢氏郎持参入東宝殿奉上罷出訖就座氏拜奉荒祭宮御衣奉行事與同とあり合せ考ふべし。しかて此時申し祝詞に祝詞式に度會乃宇治五十鈴原爾大宮柱太敷立高天原爾千木高知天稱辭竟奉留天照坐皇大神乃大前爾申久服部麻績乃人等乃常毛仕奉和妙荒妙乃御衣乎進事乎申給と云ひまと荒祭宮爾毛如此申天進止宣と見えされど同御文に云ひて祈年祭神嘗祭共に豊受宮も預り給ふべき由其事式に見えぬまと儀式にも此事の見えざるは甚いぶかし此は既く縣居大人も疑ひ置きたり。しかて上に引る義解文に以參河赤引神調糸織作御衣と云ひる赤引糸は古くは持統

天皇紀に潤五月丁未伊勢大神奏天皇曰免伊勢国今年調役然輸其二神郡赤引絲參拾伍斤於來年當折其代二神郡とは度會多気二郡なり。おきに飯野を加へて神三郡と云ふ雑例集に委く見ゆまと道前道後と云ふことも有り。さてはこの糸の名は物に見えたる始にして兩宮は延暦儀式にも此名見えて字は赤引とも明曳とも作とまど共に阿加良毘伎と訓ぜし其は大神宮雑事記長暦三年の処に赤良曳御調糸年中行事にも赤良曳と有りとあるも此糸を云ひれは如此とまと延暦十年の処貞観十一年の処延長五年の処におとに盗人ありて御調糸を取れるとし見えるも是なり。しかて此御糸を參河赤引神調糸と云ふは古とは神宮雑例集神服機殿政印事條に記せる少神部神服連公俊正大神

部神服連公道尚等ゞ。嘉應二年解狀ふも。抑神御衣御糸、事任令條并度〻宣旨以三河国赤引神調御糸可被奉織之由經言上之處。未被裁下之條。且爲恐且爲愁何者縱雖不被載于式條。神事嚴重之間。隨申請被定置料所之例況於神御衣勤者。掛畏天照坐皇大神御坐天原之時。以神部等遠祖天御桙命爲司。以八千〻姫爲織女。奉織之間御垂跡之後。于今其勤誠以嚴重無雙也。因之以彼国赤引御糸齋戒潔清可奉織之由。所被定置神祇令歟。隨致其勤之尅。自然中絶。然而麻績機殿御衣御麻沙汰之次。以三河赤引糸織之由。寛治両度宣旨。又以明白也。其中絶之子細。先度

如言上云〻。其後神部等不言上之條。雖有遲緩之恐。今補任當職之神部。乍瞻令條并度〻宣旨。爲神。爲朝。盍經言上哉。就中神部等。勵私力奉織之間。爲光隆朝臣。被撿封御糸奉納。人面重次。八千〻媛孫。住宅之條。是神。令然之事歟。爲光隆朝臣。被撿封御糸云〻。とて。此前文。爲義人大夫光隆朝臣。号有官物未進。被撿封御糸奉納人面重次住宅云〻。とあり。然れバ官物未進を咎めて。封さる其物の中ふ。御糸をゞ思ひえぬ。人面重次ゞ家ふ封免ゑる故ふ。御衣を織るふ害ありぢとして。神慮ふ。ることと知られて。未曾有事ぞ。と云へる意ゆ。人面のおとゝ。下ふ委く注べし。依爲未曾有事言上。次第之間。度〻雖被宣下。未遂沙汰。節然則任彼令條并両度宣旨。以三河赤引神調御糸。齋戒潔清可被奉織神御衣者。神事違例之御祟自消。叶神慮。仍言上如件。

謹解と見ゑれど。彼国を已獻る本縁を。いまゞ考へ得ぬ。神鳳抄ふ。參河国新内荷前御調糸四勾。新加内荷前御調糸二勾。ゐを見えとる御調糸ハ。赤良曳ゝ御糸を云ふゝ。年中行事ふ。赤良曳荷前御調と見えとるをも思合ゑべし。當国人の物語ふ。額田郡西郡ふ。三好氏ゐ依人ありて。古くり神衣祭ゝ前ゐとふ。麻糸を調進ゐこと今ふ絶ゑ。其地ふ赤曳明神と云神ゐ已と云ゐ

まゝ或人説ふ。神名式ふ。宝飫郡ふ。赤比古神社あり。此ゝ赤曳の轉語ふるべし。と云きゞいかゞあらむ。此神ハ。文徳天皇紀仁寿元年十月の処ふ。赤孫神従五位下と見え。清和天皇紀貞観七年十二月ゝ処ふ。參河国従五位下赤孫神従五位上。同十八年六月の処ふ。授従五位上赤孫神正五位下と見えとる神ふり。今ゝ上郷村と云ふ在とぞ。和名抄ふも宝飫郡ふ。赤孫郷ありて。安加比古ゐ訓已。ゐゐ考へて定むべし。

此ゝ

由有て聞ゐ依ふ就て考ふるふ。万葉集ふ。ゐのから引くてふ發語の有て。種くふゝけとるふ。十巻ふ。朱羅引色妙子と詠る色妙ゝ。借字ふて。敷栲の意ふとゝ已。色妙之妹といふゐ同狀ふ。敷栲之子と云ふるふて。敷栲ハ。縣居大人の言れ為依如く。繁くうゝくし已織物を云ふと聞ゐれバ。色妙子とハ。女の美しく和やゝかるふ。譬とる語ふり。まと同巻ふ。朱引くはゞもふまゝて寐されぬゝ。と詠る。ゝ肌のうゝくし已ふ。譬へ。四巻ふ。赤羅引く日も闇るゝまで。と詠依ゝ。赤根刺日と續くるふ同く。日ゝ明き由を云已ゐ通ゐるゐゞを合せ思ふふ。彼御糸を赤良曳といふも。

明く美く和やかる由れ已。祝詞ふ明妙照妙和妙と云ふなも思ひ合せべし。ちて十一卷ふ朱引く朝行く公と於ぐけ詠るは。赤曳く麻といふ語のてのるふ。朝をうけとるふて。朝明の雲れ明くを棚曳く狀ふ。連けるゐ已と聞ゆまぢ赤曳糸れ。實ふ麻ふ係ゐくぞ所思とる。然れぢ彼三好氏ハ出自の由ある人ふらむも知べからば。ちて糸ふ曳てふこをれ。古も今も云言ふ係と。荒妙を織る麻をむ。績むと云を思ふふ。赤曳糸は。其を曳ふ殊ふる法あ已て。績麻をれとふく勝て。細く和ふ曳る麻れ係ばし。此も彼三好氏ふ問ま欲きものふ已。○後按ふふ。絹糸ふる由儀式帳ふ有り。其れ祢宜大初位上神主公成云く。毎年九月。己之家仁養蚕乃赤引糸九絇織奉大神御衣仁供奉祭之とてり。是れ服部氏ふるべし。ちて此糸を

以て織れる布れ。式文ふ和妙衣とある布ふて。其れ御衣の料ふ獻係故ふ。此ふ採れる本文ふ。神衣と書て所謂和衣也といひ。令義解ふ。御衣をは書れしふ已。荒妙をバ荒妙衣とは書れぢ。唯ふ神衣とも。御衣とも云ることふきふ。心を著て辨べし。ちて上代ふは。同じ麻布ふても。細ふ和やかふ係ば和妙と云ひ。荒くふれきば荒妙と云るふを。上ふ辨へる趣を。穀木皮をもて織れる布を。白邇岐氏といひ。麻もて織る布を青邇岐氏と云ふて。織種れ何ふまれ。和ふるを和妙と云ふとハ灼然を。それ迩岐氏とれ。和多閑と云ふ同ことと。上ふ云るが如。ふまぢれり。絹布ふ限已て。和妙と云ふとて。れを係れ。稍後の事ふり。伯家部類ふ。白綸繒帛を荒妙と並

佐て。和妙と云るも。ちてはと今義解ふ。織敷和衣とゐの風
後のこゝをあるべし。
は。式文の荒妙衣ふ當ゐ。その荒妙ゐ。やゞて倭文ふるお
と。文布ゐ下ふ。委く辨さるゞ如くふ風を。同集解ふ。敷和
者宇都波多也。とゐの。然きゞ敷和。ウツハタよ。敷和と書
文布。荒妙。ハ一物ふて。稱の別ふるよゞ有れるかくて宇
るゐ。考ふべし。
都波多と云ふ名義を考るふ。常陸風土記ふ。久慈郡長幡
部社の處ふ。長幡部遠祖多氏命云く。其所織服自成衣裳。
更無裁縫。謂之内幡とゐの。此全文ゐ下ふる倭文連の処
云ゐ。倭文連と同祖ふり。これ長幡部と引べし。但しこれ
其事ゐ下ふ委く注べし。此ふ據きば。宇都ゐ全抜全剝ふ
どの宇都ふて。其全ふ用ふべく織さる布と聞ゐる歟。文

布の處ふ引る。万葉十一卷ふいよし子ゐ倭文ゐと帶を
結び垂ゐ。と詠る歌の左ふ。一書歌とて。古への狹織ゐ帶ふ
結垂ゐ。ゐ有ふ就て。縣居大人説ふ。此狹織ハ。即倭文ゐ狹
く織とゐふて。帶ふ用ひむ料と見ゐ。今さゞ刀ゞと云て。細
き紐ゐるも。狹之織の意ふゐ。言れしゐ然る説ふて。但し
佐那太ゐ。狹之衣よゐても有べし。倭文ゐ御帶の料ふ獻るふと。上ふ云る
如く刀ゞ。合せ縫ふことも無く。其全ふ用ふぼく。袋佐
那太と云物の狀ふ。織さる物ふる故ふ。全機と云ひ。全抜全剝
の宇都ハ。空室ゐ宇都と。自おゝら
ふ。同義の言ふるゐも思ふべし。其文ふ筋を織入きと
る故ふ。志豆織とも。文布とも云ひ。荒き糸もて織れる故

ふ。荒妙とは云ふゆけど。宇都波多を縣居、大人も、美織ふ思へりしかど。今思へば。然も非ざるべし。猶は然る說は上まも下まも注る言どもを合せ考ふべし。けて此御祭も。此時の因緣ふ依て。神代をゆ爲來れるふと。右ふ引る。

神服部、連等ゞ解狀ふ。於神御衣、勤者。掛畏天照坐皇大神。御坐天原之時云々。と云るふて灼く。伊須受能原ふ鎭奉れる時を。二の機殿を建させ給ひて。此、兩機殿の事も。垂仁天皇紀二十二年の処ふ委く注べし。御く世く嚴重ふ仕奉き法を。機殿儀式ふ。此書も。古き書目錄ふ。其名の見えとるれみふて。全書も世ふ傳もらば。今は神名祕書ふ引るを。又引るふり。難波、長柄、豐前、朝廷有格以留止大神、御衣。然、後飛鳥淨御原朝廷。更發仕奉大神、御衣。更始立此、機殿。と有を思ふ。孝德

天皇の御世ふも止させ給ふ。し。此御世ふハ天智天皇の皇太子と坐まし。專と事執給ひて。古の風を。多く漢風ふ改さ。ふ。る間ふりしかば。此事も彼太子の御心ふ出ゝむかし。斯ぞ。やごとふき神事を止させ給へる。何れる御心ふ有ゝむ。然るを天武天皇も。更ふ起させ給ひて後ふ。連綿きて絕ば。延喜頃まで嚴重ふ仕奉れるふと。大神宮式ふ。織造神衣料所、須雜物、皆以服織戶廿二烟、調庸及租各便分充。大神宮司撿校雜人等、神服織、神麻績各五十人輸調免庸。とるもて。延喜の御式もいと嚴重ふるふと知べし。大神宮雜事記ふ。天曆七年例貢乃神御衣、調備、資參之間。五十鈴川俄洗岸、洪水出來。九月。神服部、神麻績、二機殿、往還不通。依之神部人面等、乍奉持、神御衣等、三員宮司相共二箇日夜之間。逗留宇治山。以同十六日乘船。奉渡件神御衣。奉納。及。と云ことも見えとり。然るふ中

比々ゆ。亂世のあ〳〵ゆしらむ。稍〳〵ゆ此御祭の衰へもて來て。兩機殿も燒失ゆどもて。終ゆ絶て。神服部連。神麻續連共ゆ所を去るまでゆめし。元祿十二年ゆ頃。一禰宜園田長官ゆど議ゆて。彼二氏人ゆ。安濃津ゆ在ゆ所を。尋て。絶る祭を興し。彼氏人等ゆ。神衣を調へ奏ゆて。稍古の狀ゆ行ふ事とゆれゆしとぞ。かくて後ゆ藤堂家の殿人ゆ。朱雀頼母忠國須知彦之丞正矩と云ゆる二人縣郡を巡察ゆる時ゆ。兩機殿の荒廢ゆ。ゆを嘆きゆ。ゆと神部等の其料も無きゆを。く其職を勤むゆる。ゆとを感て。殿ゆ申ゆきゆ。享保三年五月十三日。兩所の機殿ゆ。各〳〵田三十石ゆ修理料を寄ゆられ。まゆ宮地ゆ榜を建て。樹竹を伐ゆことを禁ゆられしとぞ。此御機殿ゆ燒ゆる以來の事ゆ。度會清在ゆ倭姫命世記抄。ゆと天野信景ゆ。ゆを記せる。ゆを採て。記しゆるゆり。あゆき國〳〵ゆ。かゆ〳〵るゆ。ゆ人ゆちの。多ゆらむ事もゆ。○儀式帳ゆ。御船代の木を切出ゆ處ゆ。山向物忌。先以忌斧。ゆ。ゆ本切始。然後神服織神麻續內人戸人并諸役夫等。切造奉ゆも有ゆり。

故其天日鷲命者。亦云天日鷲翔矢命。產巢日神出御子。天底立命亦名角凝魂命。出子。天手力男神亦名天石戸別命。亦名伊佐布魂命。亦名明日名門命。亦出子。粟國忌

部多米連。天語連。弓削連等出祖也。次長白羽命者。示云天白羽命。示名天物知命。示云天八坂彦命。天日鷲命出子。神麻績連等出祖也。次天羽槌雄命。示云健葉槌命。示云天羽雷命。示名綺日安命。示。

出自角凝魂命出子。伊佐布魂命。倭文連。長幡部等出祖也。次天御桙命者。神服部連等出祖也。次天八千比賣命者。伊勢人面等出祖也。

天日鷲命。天日鷲翔矢命。此神の名は訓て。姓氏錄ゐ。天比和志可氣流夜命。とも書れしとゐ據て知べし。ぢて此名を。天日鷲命の亦稱ゐと決ゐ。ゐることはゐ姓氏錄左京天神ゐ。伊勢朝臣と。弓削宿禰と竝ゐ舉られとる。て。同祖の緣ゐ因まゆを聞もるを始め。其て伊勢朝臣は。天底立命。孫。天日別命之後也。とある て。本と末とを舉とゐまて。其中祖は。第百三十七段ゐ委く注ふ如く。天日鷲命ゐるゐ。弓削宿禰は。天日鷲翔矢命之後也。と云るまて知べし。さて國造本紀ゐ。二所まで天日別命を。天日鷲命ゐ誤れゐて。祖と孫を。名の似とるを誤まるゐまど。実は。由ある事れりし。木綿を作るをも。矢を作るをも。波久と云を思ふゐ。此神弓を削ア。矢を作き。木綿を作れむ故ゐ。日鷲て名を負しれむゐと灼し。矢。羽ゐ鷲の羽もて作ことは。神世より由ある事ゐり。其は既く。天上ゐて製れる矢は。鷲羽ゐて作とア。れむ故ゐ。此神の名ゐ負せるゐらむ。と知るきバゐア。此を同神ゐらバとしては。弓削氏の祖ゐて。日鷲てふ名は通えゐまど。木綿を作るゐ。日鷲てふ名は通えバ。まと此神の御子兄弟は神等ゐ。長白羽命。天羽槌雄命。天津羽く命れど羽てふ言を負るも。悉ゐ由ありて聞も係を思合れるゐ。天日鷲翔矢命と云は。委くい牙係名。天日鷲命と云係は。翔矢てふゐとを省ゐて。傳とる名ゐるゐと疑ゐし。故同神とは決と係れア。ゐは天日鷲命の。弓あり。其は第五十四段。天加奈美命の処ゐ。注れを見るべし。を削れる正しき證亦名。天石戸別命 は御子ゐる由は下ゐ次く注ゐ見て知ばし。○

天底立命角凝魂命此を天底立命の亦名と決ス産靈神
れ御子と決する由て姓氏録左京天神下伊勢朝臣條に天底立命孫
天日別命未定雜姓に天日和伎命とあるこの孫てヒコと訓ばらんびバツコと訓て裔の義に
見るべし天日別命ハ伊勢度會氏の祖にて大神宮例文まと度會
氏系図に天村雲命子天波與命子とあり塙本例文に天波与命おきて脱さるかくて其天村雲命ハ姓氏録右京天神額田部宿禰條に明日名
門命三世孫とあり此の明日名門命と云て天手力男神
に坐て亦名を伊佐布魂命とも申せり此等のあと下に手力男神の名れ
処に委く辨ふるかくて姓氏録に倭文氏を出自神魂命
を見て知べし
とも角凝魂命之後也とも角凝魂命男伊佐布魂命之後

也ともあり此を上に擧さる天底立命孫天日別命と云、
傳に合せ考るに角凝魂命といふてやがて天底立命
れ亦名ふるあと疑ふし命と申れ名の義を釈るをも思
合れ抑天底立神て天地初發の時に天と萌騰れ物に
因て成坐ば産靈神れ御子とは申ゲ難ふ似さきど
も下に引る姓氏録の傳くに此神の御末れ氏くれ始祖
を二柱産靈神に係さるは産靈神てならぬる神等の本
祖と坐れ謂ふる事と見えるに況て神名式出雲国
神門郡に神魂子角魂神社と云ふあり角凝魂命をまと角凝命とも天角己利命ともあまだ角魂神
とも云ることと知べし然れど産靈神の御子と申れに難

あし。亦此大元祖を挙げ天之御中主神を巳系ぎし其
れ古語拾遺ふ二柱産霊神を其男と傳へ伊勢風土
記ふ天日別命を天御中主命十二世孫ぞもあれぞあり
きれど十二世と云ふ長ぎさり実れ八世とこそ有
ばれき其れ次くふ注しと系図ふ記せるとを見て知べし。○天手力男神天石戸別命
伊佐布魂命明日名門命ふの天石戸別命と云れ手力男
神の亦名ふ当ふと古語拾遺大御神石屋戸を出御の処ふ令天手力
男神引啓其扉遷座新殿云く豐磐間戸命櫛磐間戸命守
衛殿門と見えさる文れ如ぐきを熟思ひ古事記ふ天石
戸別神亦名謂櫛石窓神亦名謂豐石窓神此神者御門之神也と有ると大
神宮本記ふ御戸開神天手力男命まと元く集ふ引る麗気記ふも天手力男神
亦名扉開神とも見えさり。とあるを思ひ合せて曉るぱし手力男神石戸別神

同神ありと云こと今まで人の言ざる説ふれど如かく思
ひ合べき書を記し出さらむふれ誰も辨へ曉るべき
事ふる故ふ委くれ云れべふむ。ちて姓氏録河内国天神多米連條ふ神魂命兒天
石都倭居命とふ巳て産霊神を巳系と依れ然るふと如
きぞ兒を云るれ生子れ由ふれ非ず例の子孫を廣く云へ
依ふて實れ天底立命亦名角凝魂命の御子ふ坐巳然るを古語拾遺ふ豐石
間戸命櫛石間戸命並太玉命子と有るれ並と云ひて二
神と為さるさへ誤ふる太玉命の子とあるれ甚く誤
れる傳ふり。はと御鎮座本縁ふ天手力男命高皇産霊爭
第七子思兼命子也と云るも。いと〳〵漫ふて更ふ古傳
の実ふ符はざる説ふりし。其れ姓氏録津国天神ふ委文連角凝魂命男伊
佐布魂命之後也と見え此ふ並ぱれ額田部宿禰同神男
五十狭經魂命之後也と云るふ。同神とハ角凝魂命を申せり。はと右京

天神ふ。額田部宿禰。明日名門命三世孫。天村雲命之後也。とあるを考へ合せて。伊佐布魂命。明日名門命。同神ふて。角凝魂命は御子ふることと知られ。明日名門と申ス名よりて。是やがて天手力男神（亦名天戸別命）の亦名ふるおとは知られ多ア。（明日名門を師のアスナドと訓れさるは本訓のまゝ誤ふり。アケヒナドと訓て。日神の御戸を開とる由は御名ふり。）ちて伊佐布魂命と申ス名義詳ふは思ひ得ふど。布とは文を云へバ。彼倭文氏の祖さるを以て。かく負坐るゝ。（今世よも。鷺甲ふどの文を布といひ。まさ草木の葉よ文ふるをバ。伊佐波とも云めり。又思ふよ。イサフは勇布ゝ。イサビ。イサブとも活用べし。スサビ。カチサビふどは。サビと同言ふるべし。遮サフも同言ゝ。忍日命の事考合ベし。）ちて魂は多麻と訓ばきおと。第二段角凝魂命は下ふ既よ注アき。天背男命（阿麻乃西乎乃命とも作ふて。訓を知べし。）と申ス名の義は。まゝ思得ス。（舊事紀天神本紀ふ。天背男命。尾張中島海部直等祖とふり。後人とく考ふべし。）○粟国忌部神代紀ふ。粟国忌部遠祖。天日鷲命と見え。古語拾遺ふも。天日鷲命。阿波国忌部祖也とふのアて。神武天皇は御世の事を記せる處ふも。天日鷲命之孫求肥饒地遣阿波国殖穀麻種。其裔今在彼国。當大嘗之年貢木綿麻布及種々物所以郡名爲麻殖之縁也。と見えて。（この事神武天皇卷の本文と為おれど彼段ふ委く云べし。）神名式ふ。阿波国麻殖郡忌部神社（名神大月並新嘗或号麻殖神或号天日鷲命）とあア。此御社のおを。仁明天皇紀ふ嘉祥二年四月奉授阿波国天日鷲

神ニ從五位下ヲ清和天皇紀ニ貞觀元年正月忌部天日鷲神ニ
從五位上ヲ元慶二年四月正五位下ヲ同七年十二月正五位
上天日鷲神ニ從四位下ヲ（此神の御世ニ肥饒地ヲ求て遣し給へるとりの事あるべし）ど見也。此神の此国ニ祭られ給へるとて其裔を神武天皇
彼国ニ云くと云きど大同三年ヲ頃もヲ彼国ニ在て榮エ
とるを著（シル）くまと神祇伯仲資王記ニ建久五年六月十
二日阿波国忌部久家還補（ス）氏長者角（ツノ）凝魂命之後也と云
ア。（此頃ヲ令條の如く伯職の諸国ヲ神社を進退せられし故ニ家記ニもかゝる事さへ有り。）然れ
ど此頃までもヲ此御社ヲ榮え坐けア。（古語拾遺を撰きる大同三年
とり三百八十七年ニやあらむ。然るを今ヲ其地ニ近き
国人ニ問へど詳ニハ知らぬまで衰ヲ坐るハ甚も歎ら

はしき事ヲ。神名式考證ニ
ハ今山崎村と云ニ在と云り。ちて此仲資王記ニ角凝魂
命之後也を有るはやゞて此忌部家ニ傳へる古傳を其
儘ニ記されヲと見えとア。おき天日鷲命を高皇産靈神
皇産靈神之御子天底立命（亦名角凝魂命）をア系（ツキ）ヲべき正しヲ
據（ヨリドコロ）ヲア。（ヲヲ下ニ次く云ふ證文ども見るべし。）ヲヲ此神を祭きるヲらむと
思ふ社ヲ式ニ同国板野郡ニ大麻比古神社（名神大）此社ヲ。
貞觀元年正月阿波国從五位下大麻比古神從五位上同
九年四月授正五位上元慶二年四月授從四位下ヲど国
史ニ見えとるも此神ヲる法し。（国人ヲ猿田彦神ヲ
ゞと云ふとしれまど信
し。其ヲ此社ヲ国ヲ一宮ヲる歟国人ニ問（タヅ）ぬるニ大麻

山と云ふ在りと云へり。神名式考證に、今板東村に在りと云。然れども大麻を云るを。麻を殖さる由ふて。山名も。此謂ふ因て負へりと所思ひまバかり。第七十七段に見えたる。青幡佐草日古命。於高麻山之上。蒔初麻矣。故云高麻山。於此山上其御魂坐也。又此神之坐処。於今云大草也と云る故事をも思ひ合せべし。また式に。勝浦郡に。阿佐多知比古神社。とあるも。此神なる法し。もしさもあらむ。多知も。底立命の多知と同く。多も都と通ひて。之ふ通ふ助辞。知も比古遅れ遅を同れ。男神ふいふ称名ならむ。○鉄胤云。阿佐多知比古と云神。名も。麻れをく生立さるを称て云ふ義ふも非じ。さるハ。大麻。高麻なと云ふ地名なも思合はべし。又此ふ依て按ふに。一宮大麻比古神社の祭神を。今猿田彦神なりと云由なるも。若くも。阿佐多知比古なる訛きるなら。其もサルダヒコは。正しくはサダビコなれ。サダビコ。アサダヒコ。最も似とり。アサのコは。省ける例多し。然きも。大麻比古神社。阿佐多知比古神社。同神なるべし。今猿田彦神なりと云をかふらくふ信ゲとく思ふ。仮かくも云なり。また讃岐国多度郡に。大麻神社ありに。貞観七年十月。大麻神。従五位上。と国史に見え。紀略に。延喜十年八月。授讃岐国大麻天神。従四位下。と見も。此も今大麻村と云ふ在と。帳考に云り。又式に。伊豆国田方郡に。大朝神社。石見国那賀郡に。大麻山神社なども。麻殖神なも非ざ。其も大朝神社の坐ば。田方郡に。倭文神社あまバ。由なるなと。あり。また大麻山神社の坐ば。那賀郡に。大祭天石門彦神社あまも。此も由なりておなも。若由ならば。郡名の那賀も。阿波国の那賀郡を移しとるなるべし。○多米連。また姓氏録左京天神に。多米連。神魂命五世孫。天日和志命之後也。成務天皇御世。仕奉炊職。賜多米連也。また右京天神に。神魂命五世孫。天日鷲命之後也。成務天皇御世。仕奉大

炊寮御飯香美特賜嘉名と有ふ依て記せり。但し日鷲命を神魂命五世孫とするも共に傳の誤にて実は三世孫なり其由下ふ云を見て知るべし。けて此嘉名を賜せりしは天日鷲命なり。幾世ばかの後ふりも知ぢからず。大和国天神は多米連神魂命十二世孫意保止命之後也とも有れ本と末とを挙て中を省く傳あり此意保止命のかどよや。然ふ天日鷲命之後也と云るは遠祖を挙る姓氏録の例ふ。大和国天神ふ神魂命と云ふるも其本を挙るなり。けて同書河内国天神ふ多米連神魂命兒天石都倭居命之後也とも有り。石都倭居命を神魂命の孫とするべきふ兒と云へるは例此裔を弘く云ふるなり。此を上ふ引る神祇伯仲資王記ふ阿波国忌部を角凝魂命之後也と有ふ合せ考へて産霊神之子天底立命亦名角凝魂命之子。

天手力男命亦名天石戸別命之子天日鷲命と系ぎべきおとを思ひ決むべし。故上ふ引る文ども共ふ五世孫とするも誤にて実は三世孫なりとも云ふ猶下ふ挙る諸氏ふ思合べきこと多し。まさ姓氏録大和国天神ふ倭文宿禰の次多米宿禰の上ふ。田邊宿禰神魂命五世孫天日鷲命之後也と有り。但し五世孫とするも誤にて実は三世孫なるが如し。天武天皇紀ふ十三年十二月櫻井田部連賜姓曰宿禰と有るも此ふ否ふ。櫻井田辺共ふ河内国の地名にて和名抄ふ見えたり。また按ふ田辺も多米の轉語なるべし。とく考へべし。天語連おも姓氏録右京天神ふ天語連云く神魂命七世孫天日鷲命之後也と有ふ依て記せり。但し七世孫とするも誤にて実は三世孫なるこを上ふ云るふ同じ。けて天語と云ことを雄略天皇巻ふ伊勢国の三重采女ぞ。

天皇の御怒よりふきて詠ひる歌。まと其時は大后の御歌。天皇は太御歌は處ゐ。此三歌者。天語歌也とあるを。采女ゞ歌ゐ。天地初發の時よ。一柱神は。漂へ國を。許袁呂許袁呂よ。畫成ゐ乃ゐ。ゆし故事を詠あはせとる故ゐ。其時の三歌を。天語歌(アーガタリウタ)と云りと通ゆまを。此事ゐ委くハ。彼卷ゐ云を見るべし。此姓も。天上は故事を語ゐ部の連ゐ也し故よ。かくを負ゐ。ゐゐむと所思(オボユ)るゐ就て考ゐ。貞觀儀式。大嘗會の處ゐ。物部門部語部者。左右衛門府。九月上旬中官。預今量程參集云ゝ。語部。美濃八人。丹波二人。丹後二人。但馬七人。因幡三人。出雲四人。淡路二人。句伴宿禰一人。佐伯宿禰一人。各

引語部十五人云ゝ。就位奏古詞(スフルコトヲ)とあ也。然れど此語部て。ふ部(モ)は。天上(アメ)の故事を語る部ゐ。ゐるゐと疑ゐくまと部あらむゐは。其を掌ゐ群主(ムラジ)の有ゐむこをも疑ゐゐまを。天語連ハ。そは群主ゐゐゐむと所思(オボ)も。其は天武天皇紀ゐ。十二年九月。語造賜姓曰連(トヲ)を見え。元正天皇紀よ。養老三年十一月。少初位上朝妻(カ)子。年人。龍麻呂賜海語連姓。除雜戸號(ヲ)とゐゐを以て。元はゐゐゐ語連と云也しゞ後ゐ天語連を賜へるゐと知ばし。海は天の借字ゐり。ゐて天日鷲命の裔として。語部の群主を持とるゐとは如何ゐる因緣(ヨ)あ也ゐむ。其はいまゞ考へ得ず。○弓削連。ゐは姓氏錄左京天神。ゐ。弓

削、宿禰、高魂命、孫、天日鷲翔矢命之後也。まと（河内、国天神ヨ）弓削、宿禰、天高御魂乃命孫、天比和志可氣流夜命之後也とあるヲ依て記せり。（此傳ハ孫とあれど、実ハ三世孫ヲ有べきヨリ、其由ハ上ヲ云ゆき。）和名抄ヨ。河内、国若江、郡ヲ。弓削、（由介）郷あるハ此氏人の住る地なるばし。まと神名式ヨ。同郡ヲ。弓削、神社二座（並大、月次、相嘗、新嘗）とあるハ此氏人の祭れる社ヨて。一座ハ天日鷲命を弓削、神と祭ル。（そハ始て弓を製きる神なきヨリ、其由ハ第五十四段ヨ見ヨ。）一座は彌加布都、神と。比古佐自布都、神を祭ると通ヨ。（二神を一座ヲ祭きる例多し。）殊ヨ此二神、実ハ一神なれこヲ下ヲ云如くなきバ、一座ヲ祭るべきヨリ。其ハまた此社何のヲどをゆう。二所ヲ別て。一座ハ若江、郡東弓削村と云ヲ

在て。布都大明神と稱し。一座ハ志紀、郡西弓削村といふヨ在て。弓削、神社ヲ云ふ由なると。清和天皇、紀ヨ貞觀元年正月。弓削、神、従五位上。とあり。同二年七月の下ヲ。進河内、国従三位彌加布都、命、神。比古佐自布都、命、神、階、竝加、従二位。と有ヲを合せ考へて知られ侍ル。（其ハ貞觀元年ヨ、従五位上ヲ授らきとるヨハ、弓削、神とあり、同二年ヲ、三位ヲ授らきさるヨハ、布都、神と有て、甚く位階の違へるを以て曉るべし。）ちて彌加布都、神。比古佐自布都、神と申ハ下（第百十三段）ヲ見ヨ。

とる如く布都主、神ヲ坐を。弓削、神ヲ相社ヲ祭きるヨと。は。天日鷲、命ハ。弓を削ル。布都主、神ハ。矢を作こヲを始、給ヲる謂ヲ因てあるばし。其ハ姓氏録（未定雑姓）ヲ河内

国矢作連布都努志乃命之後也。とゐまむ。矢を作はじ絶給ひゝむおと著く。此事ふわ第百十三段ふ委く云を見と。神名式ふ同国若江郡ふ。矢作神社あゆて。弓削神社と同郡ふるをも思合安ばし。矢作神社ハ河内志ふ在八尾別宮邑。矢作槻樹西北有長久年中国宣今称八幡と云へり。かゝまむ弓削神社二座を始て弓を削れる天日鷲命と。始て矢を作る。布都努志命とを二座と爲て。弓削氏の祭れる社ふ違ゐゐまじくおそ。まと矢作神社ハ矢作氏の祭まるふるべし。ちて此弓削氏と出自を異ふして。同姓を稱れゐは。姓氏録左京天神ふ。弓削宿禰神饒速日命之後也。とゐゐゆ然れども此を本姓を物部ふるを母方ハ姓を複稱るゆて。守屋大連をゆ始まるれまむ弓を削まる謂ふは非ず。其を天孫本紀ふ物部尾輿大連弓削連祖倭古連女子阿佐姫為妻と有て。守屋大連を其兒ふる故ふ物部弓削連と負るふり。ハ不用明天皇巻ふ委く云を見るべし。此例いと多ゆ。まと同録左京地祇ふ弓削宿禰出自天押穂根命洗御手水中化生神爾伎都麻呂也。とゐゆ押穂根命の御末を地祇ふ收さるを。此録の誤り。ふり。天孫部ふこそ收べゝまを負る由をいはゞ考得ず。されど此も本姓の有れおを殊ふる由ありて。弓削氏とふれるふて。ハ有べし。ちて天武天皇紀ふ十三年十二月弓削連賜姓曰宿禰とあるを此三系の氏人ふ賜へる事と見えて姓氏録ふを上件の如く何ゆも宿禰の加婆禰ふてを有ふゆ。○長白羽命天之白羽命天物知命天八坂彦命ま於長

白羽命名義古語拾遺ニ此神の名ハ下ニ今俗衣服謂之白羽此縁也と云フ但し此を俗言の如く云るハ非あり此ニ依て考るニ波と云ふハ布帛をいふ古言と聞ヘ其ハ羽槌雄命ハ羽服の波羽衣の羽おどみおハ是ニて薄くひら処くをり云る言あらむと思れしと云ふ鳥羽魚鱗おどの波まさ木葉を波と云ふもこれハ此意をり出さるあるべし長さハ長幡と云ふる言ハ例を合せ考るニ布帛ハ長ハをしを稱ふと言あらむまさ年中行事秘抄の古本ニ長白羽命と訓を加へるを思ふニこれを古き唱へて機具の歳ニ依れる名ハや然もこのらだ下ニある長幡部ハ長ハをりと訓べきハや今思ひ定めがたくて姑本れ侭ニて解るれり神名式ニ常陸国久慈郡天之志良波神社あり此ハ貞観八年五月授常陸国正六位

上白羽神ニ従五位下同十六年十二月授従五位下天之白羽神ニ従五位上おど国史ニ見ヘ下ニ注せる靜神社長幡部神社と並ぶ此ハハ常陸誌ニ今白羽村と云ふ在て白羽明神と申ハと云ハ是ニ就て按ふニ万葉二十巻ニ等倍多保美志留波乃伊宗と詠るハ遠江白羽の磯ニて今榛原郡相良郷ニ白羽村と云ハ此邊ニ云ふるなし南方記傳ニ東国下向の舟ども伊豆三崎ニて難風ニ逢ひ漂没ス分長親王ハ御子一品の御舟ハ遠江国白羽湊ニ著云くとあるも此地ニ云ハ我徒粕谷春雄ハ云るハ後風土記ニ白羽浦東境相良西限駒形之岬と云ハ今も白羽村と相良郷ニ入交る地頭方村と入交とめ地頭方村と云ハ相良郷をめ〻南ニ寄る處を境

として駒形岬までを云れ卍。駒形岬は遠江の七十里灘あり。此岬を古は廐崎を云ひ今は御前崎と云ふ。此岬ま駒形大明神と申し神あり。然きば上代ふ白羽は磯を云るは今地頭方といふ地までを廣く云卍しを後ふ地頭方村を立てをゆ白羽と云は纔ふ一村の名ま存れ除あるばし。今地頭方村と云辺も古くハ白羽と言さり々む證は當村の法恩庵と云ま元暦二年ふ鎌倉をりの下文を藏さるゞ其文ま遠及国新庄之内地頭方村事云くとりの然れぞこまをり以前ふ新ま庄と為さる故ま新庄を云ひ其を分て地頭方と称しふらむ天野信景ゞ志わじゆま地頭名は賴政以來所称也と云卍決免て此頃を卍やかく分りけむ。と云卍はて此所ふ白羽大明神を申し神坐は此神ふるばく所思さ卍其は此神ま奉る絹織る地を御衣村と云ふども由ありて聞え白羽神と今も

云ひ傳ふきぞれ卍。然れど所の者は彦火々出見尊豊玉日女神玉依日女神まて仁明天皇の承和元年三月榛原郡相良庄御前崎と云ふ現き坐して本は其処ま祭さりしを今此地ま迁し祭きり今御前崎ふある駒形明神と申は始て鎮坐る地ふ卍と云ふ○国人小栗廣伴云く白羽社神主滝氏説ふ當社を羽島田社と云をし言傳ふること有れども正き拠ま知らばと云りどぞ此は因ある事ふるゞ。はて長白羽命は天日鷲命の子ふ由は下ふ云ふを見を。亦名ども績連の下ま出るを見るべし○長白羽命の亦名を天物知命と云は琴を彈て物を知きる故ふるゞ。○麻績連ふは古語拾遺ふ長白羽神伊勢国麻績祖と有ふ依て記せゆ和名抄ま伊勢国多気郡麻績乎宇美を伊きぞれ右仁徳天皇紀の歌ふ袁美と有ま依て訓べし。続字古書ま績正字ふり然れども続を書ふゞ多きを思ふ誤字ま志あらで麻を績ま志さきで績を意ま以て績と書るゞ弘

まれるみても有べし。けて崇神天皇巻ゟ伊勢麻績君（其人の名も見え出）と
なる。おゑ此姓の史ゟ見さる始ゟ卍神祇令義解ゟ麻績
連等績麻云々。大神宮式ゟ荒妙衣者麻績氏織造ゟと見え
て上ゟ引るゞ如く然るゟ姓氏録（右京神別）ゟ神麻績連天物
知命之後也。まと（天神本紀ゟ）天八坂彦命。伊勢神麻績連等祖
と有卍（神麻続と云む神服部神宮部神奴ゟと云ゞ如し）此む出（モ）自の傳ゟ異ゟる
ゞ如くゟれど然らば決免て白羽神ゟ別名ゟ卍（されど二ツ共ゟ
其名義ゟ未だ思得ず）文武天皇紀ゟ二年九月麻績豊足爲氏上と
見え高野天皇神護景雲三年二月左京人正六位上神麻
績連足麻呂子老右京人神麻績連廣目等廿六人賜姓宿

禰と見え同年十一月左京人神麻績宿禰足麻呂右京人
神麻績宿禰廣日女等廿六人復爲神麻績連ゟと見えと
卍（天神本紀ゟ天乳速日命廣湍神麻続連等祖とあるむ出自の異ゟるはやむと同きはや）神名式ゟ
伊勢国多氣郡麻績神社ゟ卍機殿儀式ゟ此祭神を大神
御靈稱麻績屋姫神と云ゆ（此む神名秘書ゟ引と云文あり）此む相殿ゟ
坐ゞ大御神の御靈を稱ゞ御名ゟるばし（さるむ社名を麻続神社と申
ゟら大御神ゟ御靈ゟのみ祀る由ゟらめやと思べし）和名抄ゟ當郡ゟ麻績郷あ
卍此を倭姫命世記ゟ號麻績郷者麻績氏等別居此村因
以爲名也と見ゆ（ゟゟ此社の事む垂仁天皇巻ゟ注べし）○天羽槌雄命健葉
槌命天羽雷命綺日安命名義羽む白羽命の羽ゟ同じ（葉と

作るも、同じことあり。槌を借字ふて。都を之ふ通ふ助辭。知を男神を稱言ふ例の知ふ卍。槌雄と連とるを、武甕槌之男命の例ふ卍。但し此御名の例ふるときハ、羽槌之雄と読べきうとも思ふど、此を都知袁と訓べし。ちを此神の事。神代紀ふ。倭文神建葉槌命と有を。武甕槌之男神ふ從ひを。星神香々背男といふ惡神を取給へるを思ふ。いと猛き神ふ坐しを故ふかく雄々し卍名を負坐ふを。天羽雷命と申ハ名も。建々坐るを卍稱へる名ふ坐ば。然るをう安の山蔭ふ。倭文を。古傳書のまふ書れさる借字ふて。後取ふり。此神。武甕槌神の殿後神と云ことふり。と解をしハ。古語拾遺ふ。天羽槌雄神。倭文遠祖也。をあるを思洩されとるふり。其を御名を稍異ふるふ依てふほべし。神代紀の趣ふてを。後取せらをしふを違ふを。後取を為とるを。倭文を

織と云とハ別ふ卍。思ひ混ふべうらば。其を雷とを。凡を猛く剛きを。神を。も物子安弘く云稱言ふる由を。既ふ云卍。第十六段大雷神の処見るを。し。神名式ふ。大和国葛下郡ふ。葛木倭文坐天羽雷命神社。大月次新嘗。と有卍。此を清和天皇紀ふ。貞觀元年正月。葛木倭文天羽雷命。從五位上と見也。今加守村と云ふ在て。加守明神を云を。帳考ふ云卍。綺日安命と申ハをしを。次ふ引る常陸風土記の傳ふて知ばし。ちを建葉槌命やを。長白羽命ふて。天日鷲命。此子ふる由を。下ふ取總て注を見を。○倭文連。此を建葉槌命の裔ふること。神代紀ふ。倭文神建葉槌命。古語拾遺ふ。天羽槌雄神。倭文遠祖也。神名式ふ。倭文坐天羽雷命。清和

天皇紀ふ倭文天羽雷命と有て紛ふ也。然るに姓氏錄津国天神ふ倭文連角凝魂命男伊佐布魂命之後也。天神本紀ふも天伊佐布魂命倭文連等祖と見ゆ。まと河内国天神ふ倭文宿禰角凝魂命之後也。ふと大和国天神ふ倭文宿禰出自神魂命之後大味宿禰也。ふと見え多ゆ。此等を合せ考へて天羽槌雄命は産靈神之御子角凝魂命亦名天底立命之子伊佐布魂命亦名天石戸別命を出さる事を知べし。但し大和国のは中を省きて出自と末とを挙さるのみ。大味宿禰は羽槌雄命より幾世ぞりの後ふりれむ。

天武天皇紀ふ十三年十二月倭文連倭文此云之頭於利賜姓曰宿禰と見ゆ。然まだ大和河内の倭文氏は此時を已宿禰とふれ已しかれり。津国は此度は挙ふ洩りむ故ふ連と出さるふり。けて主計式ふ。

常陸国倭文二十一端。まと常陸国久慈郡絁七匹。と見え。釋紀ふ倭文神坐常陸国依之倭文常陸国之所濟也。ふと見多ゆ。此縁は常陸風土記ふ久慈郡東七里太田郷長幡部社古老曰珠賣美万命自天降時為織御服從而降之神名綺日安命本自筑紫国日向二折之峯此は二上峯をいふ折は泊を借て書誤を写し誤れるふはべし。至三野国引津根之丘ふの地名いま考へ得ず。後及美麻貴天皇之世ふは崇神天皇の御世を申せり。長幡部遠祖多氏命避自三野遷于久慈造立機殿初織之其所織服自成衣裳更無裁縫謂之内幡或曰當織絁時輙為人見閉屋扇闇内而織因名鳥織兵刃不得裁斷今毎年別為神調獻納之。まと久慈郡西静織里上古之

時織綾之機未此知人于時此村初織因名と見も是ふて常陸国とゆ。倭文絁を進れる事本は知られ。また天羽槌雄命此亦名を綺日安命と稱ることも知まゆ。但し三野国とゆ迂れる。多底命ハ建葉槌命をり。幾世ぞうゆの裔ありれ也。此れ知まうらぶ。神名式ふ常陸国久慈郡ふ靜神社名神大と所の社。和名抄ふ當郡ふ倭文郷あ人。倭文部可良麻呂と云人も見えとゆ。此れ光孝天皇紀ふ仁和元年五月。從五位下靜神社授從五位上と見も上ふ引る釈紀ふ倭文神坐常陸国と云るハ此社を申せり。水戸中納言光国卿の事を記せる西山遺事といふ物ふ寛文七年十月此社を修造仰付らきて神楽乙女八人神楽男五人を置給ひ社僧を廃らき其田多以て修葺の料ふ當べきを。神職ふ命せと乃ひまと其瑞垣辺ある大木の本ふゆ銅印一枚方二寸ぞうりあるを掘出しふ靜神宮と云文あり。諸人奇異ふ思ひ殿ふ

白しうぞ。御自銘を記して祠中ふ納め給へうし事あど見も。此殿の御心おきて。此ふ始め給事ふぐら。いと有ゲとき事ありうし。阿波祖諸国の大名等も。みふ如斯く。心定てとゆ乃れむ御世もゲふ。此御社を常陸誌ふ靜神社手力雄命那珂郡靜村と所の社。然れど今ハ那珂郡ふ屬るふ社。西山遺事ふも。ちて此祭神の手力雄命ふ坐ふと。うく見えとり。は建葉槌命の御祖父ふ坐ふ謂ふ依てふるべし。其攝社ふ高房祠と云あ社て。此れ建葉槌命を祭れ社と。国人中山信名ゲ云ゲゆ。また鹿島神宮の摂社ふも高房社と云ありて。此も建葉槌命ふりと。その神宮よいひ傳へとり。さて高房と称ふ。彼麻を高く大く殖生し給へるとゆ。其功を称ふ。称ゲ申せる御名ふるべし。房と麻とは同言ふ。此外式ふ伊勢国鈴鹿郡ふ倭文神社。るべく所思と社。これ今亀山の西野尻村と云ふ在どそ。伊豆国田方郡ふ倭文神社伊豆志ふ在所を記

さぐ（知れ、きばるる。）甲斐国巨摩郡に倭文神社。近江国滋賀郡倭文神社。本どもに倭とのみ有て、レドリと訓を付とるも、もと倭文と有しあるべく、はと例に依て文字を補。於上野国那波郡に倭文神社。此社も貞観元年八月。上野国正六位上倭文神列。於官社。同年同月従五位下。と国史に見も。和名抄に同郡に倭文郷あり。また式に丹後国加佐郡に倭文神社。與謝郡にも倭文神社。但馬国朝來郡に倭文神社。因幡国高草郡に倭文神社。因幡民談と云ものに。郡中に倭文村あり。此処の神社をらむと云。伯耆国川村郡に倭文神社。當国にまた久米郡に倭文神社。齊衡三年八月。伯耆国倭文神従五位上。と国史に見え。日本紀畧に天慶三年九月。奉授伯耆国従三位倭文神

正三位。と見えと係れ。上のごとく。此御社にあるに詳に。らば。（宮を申すを思へば。上の社にあるべきに。）はと式に駿河国富士郡に倭文神社。（国人の物語に。此社は今星山と云所の。観音は地内に在て。地者は祭神を。星神香〻背男と云と云り。此は倭文神は星神を取給へる傳を。訛きるにあるべし。）主計式に駿河国倭文三十一端。とあるまは。此国にも建葉槌命は商の住るあらむ。（国人新庄道雄物語に。舊く服織庄と云あり。今も羽鳥村といふ名も存まは。）後駿河風土記に。安倍郡の處に思津機山。（或志豆機山。或賤波多山。）又號青葉岡。有山上。憶良短歌。蔦河路乃青葉岡爾身波須禮止。袖波千志恩丹成茂古曾須禮。とあるは。此山は。其氏人に由ある山にあるば。（八雲御抄にも。志豆機山は駿河と記させとるに。）まと此山に。竝て。志津機神

社と云を載て。日本武尊。征東蝦夷之時。遭野火。屯此山。避其勞泥。尊深志專守。倭姫命之神教。（神教見世記）仍之以栲幡千姫。祭此山。合之以稚日女尊。（天照大神有深理潛心宜辨之）志津機之名者。本女功。依兩神之名。與其功業而號之也とあり。然きども栲幡千々姫と。稚日女尊を祭ると云る說は。似とる事おゞら誤おり。其は千々姫命は。祭らむは。倭文機とは云はじき謂おれば。（上ふ注ふ說ども也。合考へて曉るべし。）○長幡部。此は上ふ引る常陸風土記ふ。久慈郡長幡部社云々。長幡部遠祖多底命と有ふて。建葉槌命の裔ふるふと炳れば記せり。長幡とは。布の長きを稱ふるふふべし。長幡部

社とは。神名式ふ。久慈郡長幡部神社とある是おり。（常陸誌ふ。今ハ在所も知られざる由見とり。）類聚國史ふ。弘仁八年閏四月。常陸國人長幡部福良女授少初位上と見えとり。（此とり外ふ考へとるふと無し。）おふ式ふ。武藏國賀美郡ふ。長幡部神社あり。（和名抄ふ。當國ふ高幡。幡屋。服田。麻羽。男衾郡。幡々。幡羅郡。幡羅おど。機ふ因れる地名多きど。由ある事れるべし。）上件。長白羽命。建葉槌命同神おて。天日鷲命は子おふ由を。此ふ取總て言むとは。其をまだ長白羽命ハ。此ふ採れる本文の趣ふてハ。麻を種て青和幣を作れふのみと聞もきども。實を荒妙なも織れとし故ふ。其裔は麻績氏は荒妙を織作れることと。上ふ引る神祇令義解ふ。麻績連等績麻織敷

和衣と見え。大神宮式にも。神衣祭云々。和妙荒妙衣者服部氏。服部麻績乃人等乃常毛仕奉留。和妙荒妙乃御衣とあり。是にて荒妙の御衣は。長白羽命は。麻績氏の仕奉るなり。と著明なり。御名は白羽も。服物なるを思ふべし。されて此神は。古語拾遺石屋戸の段。の事蹟は見えて。誰神の子と云ことも知られざるが如くなれど。神武天皇は御世の事を云ふ處に天日鷲命孫。造木綿及麻並織布。と有り。此に據て考るに麻績氏祖。長白羽命は。天日鷲命は子なりし故に。神武天皇の御世に。麻まと織布を造れる人を。天日鷲命は孫と云るが

ゆ。長白羽命の裔なりて。麻荒布を作るべき由なきをや。其は古実を濫れて。職を掌る古風を考へ通して。熟く思ひ辨ふべし。されて建葉槌命と同神なる由は。まだ敷和荒妙。倭文は同物なるなれど。上に辨へたる如くなれば。其を織きる神の。同神なれこと著明を。外に上件に注せる。天日鷲命は。天手力男命（亦名天石戸別命亦名伊佐布魂命）は子なりて。長白羽命は其子に坐こそ。倭文連伊佐布魂命之後也とも有て。靜神社の祭神は。手力男命にて。其攝社に建葉槌命を祭るなどを思ひ合せて辨ふ法し。（ふは神名式に常陸国久慈郡に天之志良波神社靜神社長幡部神社と並挙られたるをも思合ひべし。）かくまで天日鷲命は孫の粟国に住て。木綿麻を作りて

奉るをば。粟国忌部といひて。其祖を。天日鷲命と傳へ。仲資王記は角凝魂命之後也と有るハ。其元祖を云るなり。其子長白羽命。亦名建葉槌命。亦名綺日安命。の孫は。神宮ふ仕奉ㄷて。荒妙を織るを。麻績氏を稱ㄷて。其祖を。長白羽命と云ふ名ふ傳ず。倭文氏を稱れる家ふも。其祖を建葉槌命とも。天羽槌雄命とも云名ふ傳へ。角凝魂命男伊佐布魂命之後也とも有るも。其元祖の名ふ傳ずとる事ふ云るが如し。長幡部の家ふても。綺日安命といふ名ふ傳へ。さ様ず。數千歳れを。ど殘。語ㄷ為ぎ言ひ繼ぎ來れるハ。自然ふ。同神ハ別名ふるおとを忘れて。異神のごと心得るまゝ有れる。其も此類ハ多かるを。次くよ云ふを見て知べし。

○天御桙命。亦云天鈴桙命。名義ハをく聞えねれど。かく負坐る事の由はいはゞ思ひ得ぬど。下ふ辨ずさる如ぬ。此神天手力男命。亦名明日名門命。の子ふ坐せば。御力は強く雄〻しく坐て。御桙のふとふ就て。別ふる功の有れるよやまと示名ふ。鈴杵と云るも。瓊矛といひて。玉を著と様も有れば。鈴を著とる杵を云ふらむ。杵をキと訓べし。此も杵字の省字ふれば。ホコと訓べし。此も杵字ふも。古本ふ杵とあり。ちて御桙命は。姓氏録ふ。天御桙命の大和国天神。ふ。服部連。天御中主命十一世孫。天御桙命之後也と見え。上ふ引る神部服部連等ゞ解狀ふ。神部等遠祖天御桙命云くと有るのみふて。誰神の子と云こと知られざるを。明日名

門命（亦名天手力男命亦名天石戸別命）の子と決（サダメ）たる由をまづ上ふ引る。姓氏錄ふ。明日名門命三世孫。天村雲命をなのきば。天村雲命は。明日名門命（亦名天手力男命）に齋ふることを著明きを豐受大神宮禰宜補任次第ふ。天牟羅雲命云々。天曾己多智命子。天嗣杵命子。天鈴桙命子。天御雲命子也とのべ。（天嗣杵命の下ふ子字脫さるを度會系図神皇系図ふ依て補へおさて此全文を第百三十七段天牟羅雲命の処ふ引て委く辨ふるを見るべし。）此ふ依べて考るふ。上ふ辨へたる如く。明日名門命は。天底立命に子（ミコ）ふきて補任次第ふ。天牟羅雲命。天曾己多智命子。明日名門命子。天鈴杵命子。天御雲命子也と有べきふ。明日名門命を無て。天嗣杵命とのきて。此命や

ゐて明日名門命ふ。ある古と灼（ヒ）し。（故上文ふ明日名門命亦名天嗣杵命と記せる也。）扱まと天鈴杵命やゞて天御桙命ふ。ある由を。安曇充ゞ持ある度會系圖ふ。天鈴杵命に傍（ナラ）ふ。天御桙命とのゐ。此を古本（フルキヽモト）ふ。別名を傍ふ記せる歟。寫し傳とるふ。人の考へて記せるふ。詳ふ。ふど。此を同神とおては。天嗣杵命（亦名明日名門命）の子（ミコ）れるふ。御名に趣（ヒ）もかゝひ。のゐ姓氏錄ふ。明日名門命三世孫。天村雲命とのゐふ。世數もをく符ひ。ぱと手力男命の御子とちに服物（ミツモノ）の事ふ功（イサヲ）まゝ事實ふも叶へまゞ。同神に別名とを定とる外ゐ。（ちて姓氏錄ふ天御中主命十一世孫天御桙命と有ふ泥ばらゝ。天之御中主神を。ならゐる神等の。元祖神ふ坐せゞ。誰神の始を。此神ふ

係さらむも難かきことと上より云るゞ如し又その十一世と云る世數より泥むまじき由も既より云り九世はなる系図ども〻天村雲命の皇祖を天御中主等より系て天八下命天八百日命かど云を系て天鈴杵命まで十一世の數を合せとるゝ後人はれ舊事紀に依て記せる後事ふり。さまぞ十一世と為とるは姓氏錄より天御中主命十一世孫天御梓命を有はあるを以て天鈴梓命と云む天御梓命の別名ふて古本より天御梓命と作るも有しかとを知べし実に天御中主命子高魂神魂命子天曾己多知命子明日名門命子天御梓命子天御雲命子天羅雲命と有ばき系ふまき天御梓命を天御中主命四世孫とこそ云おべき物かき。

まさ按ふに遠江国敷智郡濱名の岡本村と云處ふ式外かきど初生衣神社といふ有て天棚機比賣神を祠れる此社ふ仕奉ゆて祭を掌依人を神目代といひて代〻神を稱號と外し姓を服部を稱ゆ此家を毎年ゆ四月九月伊勢の神衣

祭ゆ節ふ初生衣と云を織て奉る古と古へを卍の例かり とぞ此神式の家ふ傳さる舊記の寫を見て中よりふ所思るを除て事實より熟符ひて予が識ふ宜しと思ふ限りを抄寫し置とる其文ふ天照大神入于天窟常闇之時仰建羽槌神令織縑奉供矣祕傳云縑是云斯図利蓋縑絲二筋合織作絹云縑也今世称初生衣毎年奉供四月神御衣祭是也代〻無闕除神代以來古例而天下泰平御神事也瓊〻杵尊天降日向国知食此国爾來建羽槌神之神孫統〻從神武天皇御世至文德天皇御宇稱縑宮造神代以來無斷絶掌天照大神御初生衣調進之職然處仁壽元年甲戌稔蒙勅宣叙從五位下稱神服部宿禰毛人女奉仕皇朝建羽槌神依爲衣服

元祖。取其名名波登里。其後久壽二年乙亥七月。辭官降民間。調進神御衣於遠州濱名郡岡本村内伊勢神明爲初生衣領。賜五町八反。證狀。○神鳳抄ニ。遠江國の下ニ。新神戸絹一疋と見えまた内宮新神戸号濱名神戸とあり由なることなり。十二月從山城國乙訓郡徙住遠州。用神服部一字稱神目代。毎年四月神御衣祭御初生衣。調進畢と云ひ。雜例集十月一日。二宮荷前生絁御綿供進事。濱名神戸所課宮司於離宮院奉送二宮一。兄部持參之云々と見ゆ。建羽槌神の孫ニ。神服部姓を賜ふる事。故實ニ違へるが如くなれど。今現ニ其裔神氏此服部姓ヲ。天棚機姫神を祭るなり。此の傳ニ由緒あり。て所思ふ故ニ。記し出ス。古語拾遺ニ。令天羽槌雄神織神衣文布令天棚機姫神織神衣と云ふと。上ニ引る神部等が解狀ニ。於神御衣勤者云々。以神部等遠祖天御桙命爲司。以八千々姫爲織女奉織云々。とあるとを合せ考ふれば。八千々姫。棚機姫の同神なるおそ灼きに就て思へば。天羽槌雄命やがて天御桙命なれば故ニ其裔ニ。神服部姓を賜ふるなれ非ざるとも思ふ。此も後人あやまれる。此も後人あやまれる。考てよ。○服部連。は上ニ引る神部服部連等が解狀ニ。神部等遠祖天御桙命と見え。姓氏録ニ。服部連。天御桙命之後也と有ニ依て記せり。和名抄ニ。服部。波止利と有ニよりて訓ぜし。波多於理を約なる如。多於止と切まる。天武天皇紀ニ。十二年九月。服部造賜姓曰連。また十三年十二月。神服部連賜姓曰宿禰と。の。然るニ文武天皇紀ニ。二年九月服部連佐射爲氏上ヲ見えなきが。此時ニ。既ニ連姓ニ復されと。けり。

そは上に引る神護景雲三年の紀に麻績宿祢を連と復されし例あるべし。さて姓氏録津国天神に服部連、燠速日命十二世孫麻羅、病祢之後也、允恭天皇御世任織部司、摠領諸国織部因号服部連、摂津国天神に服部連、燠速日命之後也と見えたる由緒異なる服部姓あきら古き例とも為がとし。また和泉国天孫に綺連、天香山命之後也と見えたり。綺連と云ときは決て大御神の神事にあづかりまつる称なるに香山命の孫也掌れむおとは是も異なる由緒なるべし。天孫本紀に香山命の孫建田背命、神服連祖とあきらなるべ。此命の時に賜へる神祇令義解に神服部等織作御衣云々。太神宮式に和妙衣者服部氏織作云々。など見えたり。上に引るごとし。神名式に伊勢国多氣郡服部伊刀麻神社、また服部麻刀方神社二座。おの〻社の事は垂仁天皇巻に委く注べし。奄藝郡服部神社。和名抄に当郡に服部郷あり。此社は今郡山村と云に在とぞ。大和国城下郡服部神社二座。大安寺村と云に在て今も波都里神と称せと帳考に云り。和名抄に山辺郡に服部郷あり。津国嶋上郡神服神社。和名抄に当郡に服部郷あり。芥川を去ること二里許に服部村あり。御社は池田と云処に在ぞ。帳考に云、加賀国江沼郡服部神社。因幡国法美郡服部神社。此社は貞観十六年五月授従五位下服織神従五位上と国史に見ゆ。和名抄に当郡に服部郷あり。はと式に遠江国長上郡服部神社。当国の式社考に云、羽鳥村にある若一王子社は豊田郡にあり。当郡は式の後に置れしと云郡なれば古は長上郡なりと云。榛原郡に服部田神社あり。摠国風土記に服部田村ぞ云も見ゆ。さて考證に万葉二十巻に倍多保美志留波乃伊宗と詠る哥を引て白羽命の下に注る相良郷白羽村にある白羽大明神を此社なりと云、また服部田神社も今に在て白羽大明神とは別なるとし云国人主計式に遠江国呉服綾白二十匹赤十五と見えたる

た。此国を巳綾を織出とる證あり。上に引る常陸風土記に倭文を綾といふれど、此ハ呉服、綾とのまぢ、漢風の機織りなり。然れど當国に其ある服部、神社の中に彼呉織漢織を祭れるも有べし。其た津国島上郡ある神服神社も、即其あり。と聞もるなも思ひ合べし。また駿河国安部郡に神部、神社とあるも彼服部連等が解状に神部等遠祖天御桙命と云ふなを思ふに此神を祭るならむも知ばらば。此社今た志豆機山、社の末社の如くに在て、国人新庄道雄云へり。○人面ある神名祕書に引る機殿儀式に舊記云神衣祭者皇大神御座高天原之昔人面等之遠祖天八千く姫殖桑葉於天香山以所養蠶之御糸織供進御衣於大神御垂跡之刻彼神奉載兩具御機具天降御坐之以降人面職掌人等爲其末葉

以女子者號織子以男子者稱人面職掌不遠天宮之例以四九兩月十四日進之とある傳に依て記せり。式に伊勢国多気郡に天香山神社あり。由ある事なり。今保津村服部機殿の南に在と云り。○遠た違字の誤あるべし。さまど遠ふても通えざるに非ず。人面ある事。上に引る神部等が解状にも八千く媛孫人面重次といふ人神衣を織る由見え雜事記に天暦七年九月神服神麻績二機殿例貢神御衣調備賚參之間五十鈴川俄洗岸洪水出來往還不通依之神部人面等乍奉持神御衣等三員宮司相共二箇日夜之間逗留宇治山以同十六日乘船奉渡件神御衣奉納了と有り。神部た大少神部二人とも有り。又麻績大神部重友少神部兼友とも記せり。又神服殿大神部常枝等とも有り。兩機殿に二

人形(ヒトガタ)なり。又二機殿乃神部式目乎違例レテ御衣供進之條云く、とあるよりても機殿の司ごとさる事知べし。人面を比登母と唱へて。一面は由あるゆゑ其を上ゆ引る。神名祕書ゆ見さる。機殿儀式の舊記の文ゆ據て考ふ依ゆ天八千く比賣の子孫ゆして女子を織子と云ひ男子を人面と云ふ由を織子を御衣の機織て仕奉る者の名。人面を其御はと織る事を專と職掌る名と聞も依ゆ就て思ふゆ。此は其奉依べき神くれ御衣一面ゆ〳〵を限ひる。天上宮の例は如く齋淨乎て織らせて奉る由ゆ依べし。今も貴人は御衣をば御料の數ゆ備ゆて一面ゆ〳〵織て其序ゆ以てハ猥ゆ織らぬ由ゆ。まと其衣一領ゆあるべき尺ゆ。今も一面と云ふゆも思合せばし。猶此こと年中行事ゆも有り。

爾科手置帆負命。彦狹知命而。以天御量。以齋斧而。伐大峽小峽出材而。以齋鉏立齋柱而。令造瑞御殿及御笠尋盾矣。故是手置帆負命。祢名天御食持命。祢名多久豆玉命。

彦狹知命者。產巢日神出御子。木國忌部。讚岐國忌部。伊勢國爪工連。丹波國楯縫氏等出祖也。

此段は天御量の事をゆ云はでは其次第ゐろきゐ依て。おきゝゐ說べし。其はまゐ此段の本書。古語拾遺ゐ。天御量大小斤雜器等之名也とある。此斤は借字ゐて實は度字の義ゑ。其は尺度の事ゑり抑おの御量は起原は天神は御身の長をゆ出て。其は挂まくも畏けれど。伊邪那岐伊邪那美大神。天照大御神の大御長は凡一丈許ぞ御坐ゐむ。此ゐ天神くさちは御長も大凡一丈許ゐ坐ゐむおと。准へて思奉るべし。○天御量。おの言出雲風土記楯縫郡楯縫郷の處。ゐ神魂命詔五十足天日栖宮之縱橫御量千尋栲縄持而百結く八十結く下而。此天御量持而所造天下大神之宮。造奉詔而。と見え。書紀ゐも同事ゑ。高皇產靈尊勅大己貴神曰汝應住天日隅宮者。以千尋栲縄結爲百八十紐。其造宮之制者。柱則高太板

則廣厚と見え大殿祭詞に以天津御量氏云〻皇御孫之命乃御殿乎云〻齋鉏乎以齋柱立氏云〻造奉仕禮留瑞之御殿おどにのるを合せて思ふに宮作の事本を產靈大神の御心より出て其廣さ大ちおどれ量ハ都て此大神れ定賜へる事おるを以て殿作ふいおもまお如此言ふぞ有ばき猶思ひ合ゆべきを伊邪那岐伊邪那美二柱神より國土造堅めをとて皇產靈大神を卫天瓊戈を依し賜ふ卫しを二柱神の國土を畫成し給ひて其を淤能碁呂嶋ふ突立て天御柱と爲給ひ八尋殿を化立あるゐる。此御柱れ謂ふ因て上代ハ神宮まと大宮ふ齋柱と云なまお立とる事より。おも大殿祭詞をも読て曉るべし。其御柱をまと心御柱とも天御柱とも天御量柱とも云るを思ふに殊ふ深き所由にのる事ふて。もと二柱皇產靈大神れ御量をり出と体事おるを曉るばし。かゝまだ此時の新宮も產靈大神の御心をり天御量以て量まして縱横れ量まと作狀れ事おどを定て造し免給ひれむ。右ハ准へて下げ下まくも此柱を立固めて其をやゞて我心の鎮まゆと大切ふ思ひとるものおり此おと委くハ第五段れ傳ふ注まむ此ハは畧お。かくて此大御長を摸しとる物。安外れち丈ふて。後ふおゝく丈ハ木多以て杖と神〻の丈を用ひ給へる書ども丈杖字義同じおをおり。事數多にの卫。第廿一段豫美戸の処第七十六段國引の処おど見て知べし。ちて其丈ハ。

十ふ分ちて一尺まさ其を十ふ刻みて一寸又そを十ふ刻みて一分と云ふされ今の尺度曲尺の出來とる本縁あり。本書ふ大小仆を有る大て必一丈れを云ひ小て一尺を云ふるばし。此餘種〻測量れ器ども皆此をゆそ出來よけ法。右等の事ども委くて皇国度制考ふ云へるを見るべし。○手置帆負命彦狹知命。此二神の始めて御殿を造ゆ給ふ事をゆ及ぶして名義を考ふるふまお手置とて手を布て物を度るを云ふ。其て曲尺を用ふるて稍後の事ふて古へて心手をて度れむ故ふ十握劔八握須七握脛あどの都加まさ八咫鏡の咫これ手れ度あゆ。八咫鏡の事て上第四十五段ふ委く注ゆき。かくて中古をり以來矢の長を十三束十五束あど云も古風の遺もるれり。帆負の帆て借字ふて尋負あゆ。尋は一尋二尋あどの尋あゆ。此て一廣げ二廣げと云ふ義あるべし。さてヒロをホと云て船れ帆即ヒロれゆ。又軍裝の保呂てふ物も帆と同言あるべし。かく見る時て帆も借字ふ斯て尋ハ長一丈れらむ者て。ハ非ず正字と云べきう。尋も一丈あるばく五尺の人て尋も五尺あゆ。古き大抵定れる度あり。然れて小き物は手ふて度ゆ。大れる物て尋ふて度れゆと見ゆきば手置帆負命と御名ふ負給へるあはべし。彦狹知命彦て例れ稱辭狹知て狹ハ借字ふて度知の義あらむう。ふ約まるて常あり。言其は尺度も物を度ゆ給へるをゆの名あるばく所思きてあゆ。但し

毛能佐斯を唯ふ佐斯とばかり言むと如何ふも思ふぢれまど毛能とも弘く諸物を指て言辭よて佐斯とれみ云ぞ本語ふアれは其ハサレガネ曲尺のサレも更ふり去る事をさしまて為と云ふ対ひさしふとれ又二人よて物此と彼を差違まるを云て同意ふるべし ちて掌ハ彼事を司ふ此處を領る まと神ぞ知るらむふどの斯留みふ同言ふて尺度を掌給ア法故の御名ふるぢし又若くハ今の尺度と云もの其起原ハ天津神れ大御長をアと出さらむも其を尺度と為て用ふる事ハ此神の始めて製アと給ひれむも知べらばら猶くく考ふぢし 其ハ尺度ハ家作ふ無くて叶ハざるハ更ふも云ハば万れ器械を作るよも必用ふべき物ふ法を此二神さる方ふ功く坐まれ故ふ各もく其事を御

名ふ負給アるふアれり猶委くハ度制考ふ云ひまと欠くよ云をも合せ考ふべし ○齋斧ハ齋清免て造まる由ふて此斧ハ天麻比止都禰命の造れるふふべき事前第四十七段よ云るゞ如し 和名抄ふ斧和名乎能一云與岐 和名乎乃く江ふどの アと大殿祭詞ふ皇御孫之命乃御殿乎今奥山乃大峽小峽爾立留木乎齋部能齋斧乎以伐操氏齋斧と云るこを多うり と云るハ此古語拾遺の傳ア字本として云るふて此齋部は此ふる二神れ御裔をちして云るれアと ○大峽小峽ハ縣居大人説ふ峽ハ山と山れ間ふアと万葉ふ山ろひ古今集ふ山のかひと云る是ふて万葉ふ山れ多和と云も相

似と卍。大山小山あど云て。峽と云を思ふ。今も見る
ごと良枝(ヨキキ)て。嶺ぞぎふて有らで。山れあ卍みは多きもの
あれば。かく云ふやと云の卍。通證云。大峽小峽之枝所謂杣也万葉集は線麻形之林始是
れり。和名抄は杣曾萬見功程式。仕て此枝を採れるて。天香山れあるば
きあと云も更あらむ。○齋鉏(ユ)鉏。和名抄ふ。鋤。和名須岐(スキ)去。
織助苗也。鍤。和名上同。挿地起土也。まと鎡鎩。鋤。別名也。あ
どの卍。鉏鋤同字あり。○瑞御殿て。本は。御字あきを。此訓注。まと大殿祭詞
訓注あり。本は。瑞之御殿。とのるふ依て。私は加へ故。美豆て。
清く美麗(ウルハシキ)を稱る言れ卍。瑞垣。瑞。八坂瓊。水穂国の美豆み
あ是あ卍。今俗はも。物の清く美き
を。美豆美豆しきと云ふ。然るを瑞字を書くて

其意を得てあ卍。此字の意を
あ思ひそと。阿良可て。或人云在所(アラカ)あゆ
と云卍。然も有べし。遷却崇神詞ふ。皇御孫之尊乃天御舍(アラカ)
之内爾云〻とのるて。天皇の大宮を稱(ヒ)せるあ卍。○笠(カサ)。口
訣云祭禮用。管笠也。宗因云伊勢大神遷座時。山城賀茂御
講祭等用管。小笠。今按。大嘗祭式有笠蓋。万葉云。王之御笠
爾縫(ヌハルアリ)有間菅(スゲ)。菅。清之義故祓具用之。儀式帳有菅裁物忌。舊事紀ふ。有
笠縫部。崇神紀有笠縫邑。笠(ぬひの島。傳三十五の九一丁。笠縫王四十四ル三十七丁。笠臣
ル一の五十七丁。神代紀下。一書云。以紀伊国忌部遠祖。手置帆負
神定爲作笠者(サダムカサヌヒト)。谷川氏云。大和国吉野郡玉置山ふ有玉置
神祠。元慶五年授從五位下。或云手置帆負
命也。と云り。儀式帳ふ。新宮遷奉御裝束用物事の條ふ。菅。刺羽

二柄。菅御笠二口。あゞ見えと云卽是ゐ卍。此外ゐ紫衣笠二口各裡緋綾紫刺羽二柄あぞゐきぞ此れ後よものし給へるれれど云ひび。まと新宮遷奉時儀式行事の處ゐ。大神宮司。人垣仕奉人等召集氏。卽衣垣衣笠刺羽等乎令持氏。人垣仕奉男女等乎。太玉串令持捧氏。左右分立氏云〻荒祭宮の裝束ゝ處ゐも。菅蓋一柄口徑五尺五寸。金餝とゐの卍。まと御笠縫內人無位乙淨麻呂。右人卜食定。補任之日後家祓清齋愼供奉職掌。御笠廿二蓋。御蓑廿領。敬供奉具顯月記。條。まと四月十四日。神衣祭の次ゐ。同日御笠縫內人造奉。御蓑廿二領。御笠廿二蓋。卽散用。大神宮三具。荒祭宮一具。とゐの卍。此外ゐ大奈保見神社。伊加津知神社。風神社。滝祭社。月讀宮。小朝熊社。伊雜宮。滝原宮。園相社。鴨社。蚊野社。ゐとへ奉ゐ。

き。延年中行事。四月十四日。條ゐ。風日祈宮祭禮。号御笠。神事。自宵館參。卯尅。各著衣冠。經中道參列。一殿。于時日祈內人捧持御榊三本。笠縫內人付御蓑笠於御榊。三本捧持。各衣冠云〻。自南御門進參。前陣。御榊。次御笠。次正權禰宜。次玉串。大內人。次物忌。父等著。座石壺如常。日祈笠縫內人御榊御笠捧持。蹲踞。八重疊東西向。于時一座進參。御前。石壺讀進詔刀。度會宇治五十鈴河上。下津石根。尓大宮柱大敷立。高天原尓千木高知。皇御孫命乃。称辞定奉。挂畏天照坐皇大神。廣前尓。恐〻甲久。今年四月十四日。今時乎以。宮司。常奉風日祈。御幣。并御笠蓑。日祈。內人姓名。令捧持氏奉。狀。平安聞食云〻。四方。國乃人民。作食五穀。雨甘風和。年穀豊饒。恤幸給。恐〻〻申。年号四月十四日。次遠江神戸種薑詔刀。件種薑兼日酒殿進納。今

日件出納從西御門持參風日祈詔刀畢後八重榊上進也
○此詔刀も前後の文なかれる事なく中ゝ宮司常も催
奉る遠江の神戸は種薑御贄を奏る狀詔刀畢後内人等
を平けく安らゝく聞食云ゝと申れり
御榊御笠王串御門奉納歸著本座于時一同八平手兩端
奉祈朝廷後自西御門退出云ゝ櫻宮南置石著座東上北
面於鋪設讀詔刀云ゝ諸神奉菅笠狀也諸別宮并諸末社
月十四日今時乎以氏月読伊佐奈岐滝原並伊雜滝祭皇
大神廣前恐ゝ申宮司常奉風日祈御幣并御笠御菅等奉
狀平安聞食云ゝ四方國人民作食五穀雨甘風和年穀
豊饒恤幸給恐ゝ申○天津神國津神ゝも如此申て奉本
座歸著于時一同兩端其後諸別宮内人并諸社祝部等件
御幣並御笠御菅等給預彼宮ゝ並社頭持參也云ゝ其後
風日祈直會饗膳預云ゝ御笠菅等自菅裁内人之手請取

菅御笠縫内人於宿館奉縫在菅裁並御笠縫神田等抑件
御笠御菅自内瀬兼田備進雨不浴例也云ゝ○抑遠江
國所進種薑今日供進用殘禰宜中分配而禰宜各以其内
子良宿館南垣内爲物忌父等之役奉殖然後九月御祭之
時御饌所供進也ゝど見也○示ゝは宇受賣命の持て俳
優ける料のもれまと新宮ゝもらざる示ゝは神武天皇
卷ゝ宇摩志麻遲命は示楯を立と依を思ふ法し○盾は
彦狹知命作ゝ其は神代紀下一書ゝ彦狹知命爲作盾
者と有ゝ通證云盾防非違隔不淨之具兼俱云神宮遷幸
有盾戈大嘗會南門立盾戈踐祚大嘗祭式云楯丹波國楯

縫氏造之戟紀伊国忌部氏造之舊事紀宇麻志麻治命率物部乃竪示楯嚴威儀と見え兵庫寮式踐祚大嘗會新造神盾四枚丹波国楯縫氏造云〻と有ㇾ又通證六四十九丁ふ正通云白盾者神社所用而神幸之時以爲圍也兼良云白木色大嘗祭時宮門之南立楯戈是類也重遠曰楯以白爲飾是遠程行旅之備也天子行幸之時要畫獸白楯韓昌黎元和聖德詩獸盾騰弩註畫獸之形謂之獸盾天子行幸之所止爲之藩衛行則斂之と見え。まと下第百十六段ふ百八十縫之白楯とも有ㇾ神名式ふ丹波国多紀郡川内多〻奴比神社三座氷上郡楯縫神社常陸国信太郡楯縫神社但馬国養父郡楯縫神社氣多郡楯縫神社ふぞ見ゆさて右三品笠示盾ゑ大御神を新宮ふ遷奉るとゑの料ふ卍○天御食持命多久豆玉命此二の名義ハ次ふ注ぎし○木国忌部ふゑ神代紀ふ以紀伊国忌部遠祖手置帆負神定爲作笠者彦狭知神爲作盾者と見え古語拾遺ふ神武天皇の御世ゑ事を記せる處ふ今天富命太王命之孫率手置帆負彦狭智二神之孫以齋斧齋鉏始採山材構立正殿故其裔今在紀伊国名草郡御木麁香二郷古語正殿謂之麁香採木齋部所居謂之御木造殿齋部所居謂之麁香是其證也和名抄ふ名草郡ふ忌部郷荒賀郷ありこれふるべし と有て二書ともふ其祖をかく二神ふ係とるを思ふよ日子狭知命ゑ手置帆負命ゑ子ふて御父子ともふ木工屋作ふどの事

を知給へる故なりとぞ。其中に父神は笠を作る事を得給ひ、母は故ありて持分てり。子命は盾を作る事を得ものし給へる係あるべし。

て彼国は木のなく生る国なれば也。其由は第六十七段須佐之男大神五十猛神に木種を殖生し給ふ処なり云べし。神名式に紀伊国名草郡鳴神社。名神大月次相嘗新嘗。

国史に嘉祥三年十月紀伊国鳴神従五位下。貞観元年正月従五位下鳴神従四位下なと見也。令集解に紀伊国鳴神とあり。本国神名帳に正一位鳴大神とあるに依てナルノ神と称ずべし。南紀名勝志に中郷鳴神村の東辺に在ぜ云り。

去ぬ手置帆負彦狭知二神の御社なりぞ。其は帳社は日前宮の東五町ばかり。秋月村の東口なりと。荒廃考に此きて社も無ぢしを享保十八年領主なり造営して舊址に随ひて二社を建ぬ。社南面七尺ばかり瑞垣門あり。鰹木東は外そぎ西は内そぎあり。社人を武川主馬と云社

域の内西の方に斎館あり。神名知ぜ。其社をり南六町ばかりに小山あり。忌部山と云。山下に小村あり。忌部村と云ふ。是即手置帆負彦狭知命の所居なること疑なしと云り。

永享大嘗會記云。兵庫寮、神楯桙立之件、楯桙紀州鳴神社氏人等相論之經御沙汰之後祝與氏人相合楯一帖充造進云々と有り。是鳴神社の手置帆負日子狭知命なる正しき證れり。

ちて此二柱神は誰神の御子ぜ云ふと。書どもに所見なる事なく。據考に考ふ法き便なきに似ぬぜ。其為の木国名草郡に住るに就て。熟くに思ふに此は紀伊国造紀直は祖なるぱく所思と。其は姓氏録和泉国天神に紀直神魂命子。御食持命之後也。神代系紀にも神皇産霊神兒天御食持命紀伊直等祖とあり。まと拾遺異本に神皇産霊神此紀直祖也ぜあるは其本を云るあり。まと河内国天

神ふ紀直神魂命五世孫天道根命之後也。国造本紀ふ紀伊国造檀原御世神皇産霊命五世孫天道根命定賜国造と見も世数を
く符巳信ふ道根命も神皇産霊神の五世孫ありれも然
るを神代系紀ふ天御気持命の弟とせるも誤あるべし。まと和泉国天神ふ大村直紀直同
祖大名草彦命男枳彌都彌命之後也。まと高野大名草命之後也とも見も。
清和天皇紀ふ貞観五年九月紀伊国名草郡人内竪従八
位下紀直貞吉云く。れど有ふを合せて思ふふ御食持命
と云は手置帆負命の別名ふるまと灼し。其由も御食れ
食を借字ふて。さるも此神食物の事ふ由ある神ふら始を御食と書るハ別義ふるべき譜ふまれ
思ふべし。名義ハ御木持ふるべし。式ふ加賀国江沼郡ふ御木神社あり由ある社ふを木
を祀と云へる事も上第十四段ふ委く注めき。其も御殿造る御木の事ふ與か

巳持ふをしの名ふり。上ふ引る御木鹿香郷の故事を思ふべし。かくて此神
名草郡ふ住しを其四世孫道根命の時ふ神武天皇御代ふり彼国
造ふ定給ひ紀直と云尸をも賜ひて此を巳国造の事も
行ひふ〳〵も猶神代を巳れ由縁のあふ〳〵名草郡ふ住
て御木御殿の事まと御笠楯桙ふどを造仕奉れる其職
號を忌部とも云るれらむ。但馬国養父郡ふ式ふ名草神社あ巳同郡ふ楯縫神社もあ
れむ由ある事ふり紀直の名草郡ふ住るまとも大名草彦といふ
名を負る人ふるまと清和天皇紀ふ名草郡人紀直貞吉と
云人ふ依ふを炳焉し。ふ国史ふ此郡人ふ紀氏見とる
を今もこの一人を挙て證と為ふ
かゝまば紀氏を巳別さる家ハ姓氏録ふ十四家ぞり巳

も載られしと雖。其みな手置帆負彦狹知命の裔に外も有る。其中に。右京天神の処。大家首。高家首など云姓を大御家に由て雖姓なるべくぞ所思る。また和泉国の未定雑姓に。首神魂命之後也と有る也。同祖の裔なれども諸国に。国造は多く雖中に出ざるゝ熟考ふべし。

雲国造に次て。此国造を任給ふ儀の貞觀式に載れる也。天御蔭日御蔭と隱坐て。天下所知看る大宮を造る雖功を重みし給へ雖。上代を。の御儀は。存傳ハれるよも有ばし。おゝ神武天皇巻に。紀伊国造を定給ふる事を挙て。彼処に云を見るべし。○讃岐国忌部。また古語拾遺神武天皇御世の事記せる処。に手置帆負命之孫。造弟竿。其裔今分在讃岐国。毎年調庸之外貢八百竿。是其事等證也。また手置帆負命讃岐国忌部祖也とも有り。と有に依て記せ。臨時祭式に。凡桙木千二百四十四竿。讃岐国十一月以前差綱丁進納。師説に。此を合せて思ふに。讃岐国名義は。竿調国ゝ乃都も奴と切。平の省ゆとるありと云はまた。今按ふに。竿木国おらむゝ。中右記大治二年六月八日の処。に。頭中将送書云。月次祭桙柄等事。讃岐国所濟也。隨去春進濟神祇官了。而後彼官火事之時。已以焼去重可召彼国歟。但可令本官辨濟歟。など見えと。此等を合せ見て。彼国をり桙竿多進れることを知べし。和名抄に。刈田郡紀伊郷また多三木郡も有。今は三キと云とぞ。また隣三野郡に。高野の郷も有り。此は木国を。此氏人の別り住るに依て外。神名式に。同郡に。高屋神社有。和名抄に。高屋郷ありて。多加也と訓注をそ。とり。此社は。清和

天皇紀ふ。貞觀九年五月。授讃岐國正六位上高家神從五位下。と見え。姓氏錄和泉國天神。ふ。高家首神魂命五世孫天道根命之後也。とある殘合せて思ふに讃岐忌部の祖神を祭れる社ふるべしまた安房國朝夷郡高家神社と云も。同神ゐ依ばし。其れ古語拾遺神武天皇の御世れ事を記せる処に天富命阿波國れ忌部を率て彼國ふ住きし事見ゆ此時ふどに祠れるふるべし。○此社の在処今白子村と云ひ社人を鈴木兵庫眞知彦と云ふ穂積姓にて先祖れ木國をり來きりと云傳ふ祭神を俗ふイナリと云実ハ宇気母智神ふ。ゐきぞ是をり一里ゞ〻り有て莫越山神社あり祭神れ手置帆負彦狹知命ふ。此を本宮と云ふ外に新宮と云ある。其れ火く出見命を祭れりとぞ。けて清和天皇紀ふ。貞觀九年十一月。讃岐國刈田首安雄賜姓紀朝臣と云ふ。此れ信は武内宿禰命れ後ふ

れども紀氏を稱ふて。當國刈田首ふて。此國ふ住るれ由ある事ふ。其由れ仁德天皇卷武内宿禰の商を巻とる処に委く云べし。○爪工連ふは姓氏錄和泉國神別ふ。爪工連神魂命男。多久豆玉命之後也。雄畧天皇御世造紫蓋爪并奉飾御座仍賜爪工連姓。とある。多久豆玉命れ手置帆負命ふ。ふの雄畧天皇の御世に紫蓋爪を造云くれ事れ後に有し事を始ての如く心得る文ふり外にも例ある事ふり其れ此爪工ふ並べて挙げきとる掃守連をも雄畧天皇の御世に掃守の事を監ると云ふ。ふきど実れ葺不合命の時ふるを思ふべし。また同録左京神別ふ。爪工連神魂命子。多久都玉命三世天仁木命之後也。とも云ふ。和名抄ふ本朝式云齋王行具翳二枚和名波と云ふ。大殿祭詞に天之御翳日之御翳と有を。御鎮座傳記ふもかくあり。

天之御蔭日之御蔭と云義ありしなり。然きて笠と爬とを。大抵同物なるべし。清和天皇紀貞觀四年七月。伊勢國安濃郡人爪工仲業賜安濃宿禰。神魂命之後也。とも有り。斯て多久豆玉命と云。御名を以て祀きる社は。大和國葛下郡石薗坐多久豆玉神社二座。並大月次新嘗。三代實錄貞觀元年正月廿七日。從五位下石薗多久豆玉神從五位上。と見り。式に依て考ふるに。豆は豆誤なり。はと年中行事秘抄に多久須玉依媛命。と云もあるも別神なり。○丹波國楯縫氏おの事は。兵庫寮式に。踐祚大嘗會。新造神盾四枚。丹波國楯縫氏造。云く。また大嘗會式にも。楯。丹波國楯縫氏造之。とあり。

コヽニオホセアメノクシアカルタマノミコトニテ レメツクラヤサカノ
爾科天櫛明玉命而。令作八尺
マガタマノイホツノミスマルノタマヲオホセヤイカヅチノ
勾玉五百箇御統出珠。科山雷
カミニテ レメトラアメノカグヤマノイホエマ
神而。使採天香山出五百枝眞
サカキノヤソタマグレヲオホセヌヅチノカミニテ
賢木出八十玉串。科野槌神而。
レメトライホツヌノヤソタマグレヲ
令採五百箇野篤出八十玉串

矣。故是天櫛明玉命者。亦云天豐玉命。亦云天明玉命。亦云天祖命。高皇產靈神出女。拷幡千千比賣命出妹。出雲國忌部。忌玉作。玉祖連等出祖也。

天櫛明玉命。名義次ゐ云ばし。○八尺勾玉之云くは。上第三十四段ゐ注せ已。○山雷神ゑ。卽大山津見神ゐ已。第十七段合せ考ふべし。山神ゐ坐ゲ故ゐ。此神ゐ科ゐ孫ゐ已。但し御殿を造る枝ゑ手置帆負命ゐどの自採き已と聞ゆるを。賢木をバ殊ゐ此神ゐ採しめさるゑ由ゐ事ゐるべし。○五百枝眞賢木ゑ。枝葉の繁茂を云。仲哀天皇紀ゐ。五百枝賢木とも有已。此ゐ依て本ゐ五百箇眞賢木とゐる箇を枝ゑ改。於其ゑ五百箇眞賢木と云るも古言ゐきど。五百箇石村ゐど云類とゑ達ひて。紛らしく。五百株とさ矛聞ゆきぞ外り。ちて次ゐる五百枝野篁の枝も本ゐ箇とあるを。此例ゐ倣ひて改矣。此ゑ百枝槻。百枝桂ゐどもゐる類ゐ已。眞賢木。書紀ゐ眞坂樹と書り。賢坂ともゐ借字ゐ已。眞ゑ例の美稱。佐加木てふ言。義ゑ。仙覺ゲ万葉解ゐ。榮ゐる樹を云外已と云已。然も

有ばしぢて其木を下眞拆葛の処ふ舉る縣居大人の説も有きど其おの詳ら祢む今も神事ふ用ふ依榊と爲てのに可し榊字を後紀ふも見えたり所謂和字也万葉ふハ神木とも有り字鏡ふ榊椙梶三字佐加木と有り此を何も神ふ備ふる意を以て此方ふて製まる字ふ已同書まと和名抄ふも龍眼木を當さるを非ふり

谷川氏云此樹信祭神之靈木未聞西土有此種故不借漢名與松栢之品異矣或為龍眼木或近世為冬青樹皆非と云るを然る説とおがも然るを屋代弘賢翁説ふ此木漢土ふも有扨まと云て今を漢名も付さりと云れとり

日吉社秘密記と云もを此ふ榊者諸木祖木也とのるを古く據あるおまを○野槌神おを草野比賣神の亦名ふて

やがて豐宇氣毘賣神の幸魂神ふるおと上第十三段ふ云已

き此を野神ふ坐ゲ故ふ野篶を採せと依ル已或人問此神の本躰と坐ル宇気母智神ハ既ふ殺さえ給ヲるふ其幸魂神の此処ふ集ひて如此もの し給へるハいのふ答幸魂ハ謂も分身ふ坐せど本神れ也と乃ヲりとも集ひ給を む おと何ゥ疑を む其ハ大国主神の幸魂神の帰來さ乃ひて物宣ひ給ふ大国主神れ さらふ御自れ幸魂ふる お ぞハ知給を で汝ハ誰也と問給へるを思ふべし神の御上を最も測ゲ さく奇異ふる物ふ非ぞ然れど此とき既ふ殺さえ給へる豐宇気比賣神の出給ふとも更ふ疑ふべき由ふきを況て分身と坐ル幸魂の神ふるをや○野篶縣居大人説ふ篶を薦を書る本は誤ル已薦を蔺のことふり万葉ふ眞薦刈大野川原之水おもどふと詠るを思ひて思ひ惑ふ篶ハ古れ炙竹の類ふて いぞ小くて色黑き おと勿き

竹ふ已其を阿波土佐ふど此国ふては須くと云と云已東国の山辺ふては笑竹をも云ふ云者れあきど ふ不別物おり後世の歌ふ吉野の嶽ふ

ちぐ分て。と詠るも此野篤ゐ。旅人の歌ぐの古れや。さひ合べし。万葉二ゐ水篤苅信濃の眞弓云ゝ。今本に是も篤されや。ゐど云ゐるも思を薦ゐ誤きゆ。

水篤ハ眞篤ゐて。おに眞篤を苅野と連とゐ。此物

今に須受と云ゐども。上代ゐを須くゝも。須受とも云て。

名義に。此ゞ葉の。須くと鳴る狀を。ゐ負とるゐり。其由に

下第百三十四段。伊須受宮とゐる処。ゐ委く云ゝ。因友恒足云く。野篤の事。師大人の説ゐて明ゐり。按ふゐ今の俗言ゐ。黒色ゐ赤色を帯とる染色を呼て。スヽタケイロと云ひ。又とぐゐスヽタケゐども云に。もと此野篤の色をゐ出とる名ゐるべし。扨古き家の内ゐ出來る煤茶を。スヽと云も。家居の木柱ゐど。ゐ彼煤のゐみ著とるゞ。古びてに。自らゐ其色れ。黒く赤げゐゐ。ゐもくもゐれむ。轉じてハ。彼をも又スヽとに名ゐ負せて云ゐるべしと云べゐ。然も有べし。○八十玉串。八十とに多ゐ數の多ゐを。大凡ゐ云へる外ゐ。必しも數の八十ゐゐ。きとれ事ゐに非ず。玉串ハ。縣居大人説ゐ。玉を著とる木竹を云。後世ゐ霊串の意とゐるに。例の古意を傍ゐして。理を云むとゐる。ものゐり。万葉十三神祭歌ゐ。吾屋戸爾御諸乎立而齋戸乎居。竹玉乎無間貫垂云ゝ。今云。御諸乎立に。神乃御室を齋立る外り。竹玉に。玉ゐ緒を貫き統て。竹ゐ著る外り。無間に繁ゐて。竹玉を數多垂とゐるを云。齋戸に忌篤。嚴篤ゐど云る是ゐり。ちて例ゐとるゐ。居の上ゐ。齋穿の二字脱とゐべし。宮主口傳抄。節折れ処ゐ。竹玉れに。ゐ。とゐり。此と異ゐるゐ。考べし。と詠ゐも。此玉串外るべし。ゆゑゐ。是信ゐ玉串に本義ゐるばし。御鎮座次第記ゐ。号玉串。内人奉仕。眞賢木。五百箇御統玉之縁也とゐるハ。決て古傳ゐ依きる説ゐらむ。まと師は大神宮式ゐ。著木綿賢木。是名太玉串とゐ。玉串の名に手向串ゐるばし。年気を切れず米ゐれぞも。多米串と云べず。自ら多麻串と

も聞ある故に玉の字と言れおきど信がとし此も万葉歌む借て書おらむ

れ趣をも合せ考るに本は信に玉を貫垂あめけむを

や後に玉を著ぶも奉ぷれむが後に玉終に古の手ぶ

りは廢て玉串れ名のみ存めて木綿を著る賢木を云

の稱おとて爲れる後れ狀を記さきしみて決て本義に

は非じかしその言れ切なる言れし說も少し穩當おらぬ

でも玉を心ちぞぷる大殿祭は柱に挂る榊に後ま

著るおり。まと玉とも唯に串れ美麗を稱とる辭のおと

云依も有れど此は正に彼玉示に玉を著ふ依如く作れ

ふおらむ。此に玉を著る所由も下に云むさて此も野

山に在る篤賢木を採る所おるに玉串と云る

い其に玉を付て玉串と爲る後の串とは根掘に爲と

名を始へ廻らしてかく云るおり。

る賢木れ大おに依に對て刺立もし手に執持ちもぷるば

うぷに少き故に云へるに篤玉串と賢木玉串と打交牙

て齋庭に差て榊玉串は後世に爲る如く手に執て神

前に進ぷれむと所思も其も大御神の神事に榊まと

太玉串を仕奉る狀を神の儀式書どもに依て考るに大

宮に仕奉る宮人れ中に山向物忌物忌とも云へど山向も此は男おり。

物忌父と父子二人有て内宮儀式に右二人に食定補任

之日後家祓清齋敬供奉職掌太玉串并天八重榊取備供

奉云く此太玉串并天八重佐加岐乃元發由者天照坐大

神乃高天原御坐時爾素盞烏尊依種く荒惡行事天磐戸

閉給時爾。八十万神會於天安河邊。計其可禱之方。時伊斯
香山仁立氏。掘眞坂樹氏。上枝懸八咫鏡。中枝懸八咫縵。乃
曲玉。下枝懸天眞麻木綿氏。種々祈申支。此今賢木懸木綿
太玉串止號之。以此天乃八重佐加岐。并禰宜乃捧持太玉
串。仁大中臣隱侍氏。天津告刀乃太告刀乃厚廣事遠多々
倍申玉串。發由如件。亦父毛子共忌慎供奉と見え。八咫縵
の三字
む。八尺瓊の誤ふるべし。此物忌父子は賢木を取備ふ。仕奉る事實も。
まだ同書は六月十五日の下ふ。山向物忌之天八重佐加
岐令差立林餺奉并宮之御垣之廻令差立林餺奉之と見
え。年中行事ふも。四月十四日神衣祭は條ふ今日内院南

面番垣。並玉串及四御門合三重玉垣奉差御榊。是公候氏之勤也
又奉差八重榊。其員數百本也。是山向内人之役也。内宮儀式大神宮式とも
ふ。物忌と云るを。此書ふ内人と云り。又荒垣鳥居。并一二鳥居。興玉榊等同
今日所奉差也。差荒祭神拜所榊。彼宮下部役也。又玉串料
榊。山向内人之勤也。總奉差御榊。事。年中四箇度也。四月六月九月
十二月御祭度也。但九月。以神御衣祭之時奉差榊。十七日御祭者被行例也。近代二月祈年御祭同所奉差也。と
見。爲依ふて。古く神事の時ふ。宮ふも御門ふも賢木を差
立て。林餺とる古と灼く。八重榊と云も刺立る故の名を
聞も。正月ふ門松を立る事も。是をゆ起
已々むと所思も。其由は別ふ云べし。其も疑ふく。此
時は故實ふ因れる事と知られ。まと山向と云ふも。此ふ

山雷神の榊まと玉串を取きるふ因きる號と聞もきで。山平ば義ふるべし。凡そ物忌と云ば女ふるふ此物忌の男ふるも山雷神の為始とぱし事を掌る故れらむう神武天皇紀ふ薪名為嚴山雷とのるなる按ふふ此職を掌る人も殊ふ齋ひ清まハぱ仕奉る故ア物忌と云ふべし其ば内宮儀式新宮造奉行事ば處ふ山向物忌。以忌鎌氏草木苅初然以後役夫等草苅木切所ゝ山野散遣然宮造畢と見え二月始の子日ふ朝御饌夕御饌ふ供奉る御田の種蒔ば處ふ禰宜内人等率山向物忌子湯鍬山爾參登時波湯鍬山とば一ッ山の名ふ非ば湯鍬の木を取る山ゆゑふ云ふり忌鍛冶内人乃造奉留金人形并鏡鉾種ゝ物持氏山口神祭然到櫟木本即木本祭把物員如山口祭然其木本乎山向物忌仁以忌鉾氏令切始氏然即禰宜内人等戸人夫等爾令切氏湯鍬仁造侍云ゝと見ゑるを思ひ合せて悟ばし。まと後ふ神祭ふ集へ当人ゝば各ゝ賢木を進る事ば是時集ひ坐る神等ば然爲とぱれむ故事のまふ〳〵物ばるふらむうし。後世の神祭ふ仕ふる事ば多くば此時の事ば存れるふるふ思ひ合せて悟べし。其ば同書二月祈年祭の條ふ山向物忌父我造奉留太玉串宇治大内人捧持氏云ゝ即禰宜召大物忌父令進第三御門之左右置進云ゝと見えて祭ばとふ用ふる榊木はやゞて山向物忌父子ば取備へて其を宇治大内人の取次て一禰宜ふ進るを。神前ふ進るふて悟るばし。宇治大内人を玉串内人と云ことも玉串ば取次て掌れば

ゐ卍まと玉串を進卍置く御門もあるよ。第三御門を玉串御門ともいふ。年中行事ゐた。卽玉串御門とあり。此を玉串行事と云ふ。又古の事を。年中行事ゐ記せる狀いと委ゐ卍。其ゐ祈年祭ゐ處ゐ祭主宮司各束帶。先祓所砌在祓。但祭使。祭使やゞて大中臣祭主ゐり。祈年祭の御使と為て來らるゝ故ゐ祭使と申せり。北向二島居之左南柱西宮司南向右北柱西而被立祓勤之。奉大麻五尺許榊枝付木綿御鹽湯小土器入白塩以榊枝献之云々。參玉串行事所御鹽湯所禰宜各束帶著清衣木綿件麻自長官請預云々。玉串大內人物忌父等皆衣冠云々。山向內人鋪設調半疊祭使引裾進寄跪候件半疊于時玉串大內人進寄自山向內人之手。請取鬘木綿奉使使差笏手一端請取著用後拔持笏。

互拜後被著本所。後官司引裾進寄鬘木綿同前同自山向內人手。請取御玉串二枝奉之宮司又一端請取左右手各捧持一枝。互禮起座進參北向立南屏垣前次一座引裾跪件半疊左玉串大內人自山向內人之手。請取御玉串四枝奉之于時一拜差笏一端先左取左二枝次右取右二枝一拜立右進參南向立南島居西柱下二神主以下同前西列立次玉串大內人自山向內人之手。請取御玉串八枝立禰宜次玉串行事是也榊云玉串榊每枝結付木綿也抑神主玉串大內人物忌等之著用之鬘木綿手禰各自宿館著用例也于時次第參入引裾各立向宮司對拜於四御門在御鹽湯云々。使起座引裾於八重榊前東南之石壺拜作法如

常詔刀被讀進云々。詔刀畢抽笏拜著本座。今日宮司无詔刀。玉串大内人取持玉串置前起座進參一拜差笏請取宮司之榊宮司拔笏互拜後玉串大内人以件榊奉一座。一祢宜を云あり。一座所勞榊置前一端請取之取榊之時打手左右取事毎度儀也。玉串大内人立退拔笏一拜後著本座。于時大物忌父兄部蹲踞一座。大物忌父荒木田名乘召唯稱參御前蹲踞拜後差笏給玉串一座取持以前手玉串禮後大物忌父左歸奉納玉串御門。東左脇石疊上。歸著本座。于時宮守物忌父兄部蹲踞于時一座召宮守物忌父荒木田名乘唯申進參給御榊次第同前也。云々畢奉納同前也。但右脇石疊上也。于時玉串大内人以八枝所帶之御玉串四枝左右各二枝捧持而奉一座歸著本座。于時地祭物忌父蹲踞一座召地祭物忌父荒木田名乘唯申進參給之奉納。左石疊。歸著後玉串大内人以所帶之御玉串四枝奉件御門右脇石疊上歸著本座。抑三色物忌父等。并玉串大内人奉御榊於玉串御門左右脇石疊上之時。先於御戸中間乍持御榊一拜御前之後抽笏一拜置御榊處之後歸也。又奉置時先置左手之御玉串。次置持右方手榊也。又交替人之時以我左手持渡人左手。以我右手持渡人右手。更无違。又請取人手榊時同。必在手。御榊事畢拜八度。開手兩端。奉祈朝廷。其後各起座云々と見也。此をとく讀辨へて。玉串

行事は狀を知ひまと神ふ賢木を奉るおとは。天上の此時の儀式ふ因る事ふる歟悟るばし。但し式は定められとるふぞ。後ふ有べき。神名祕書ふ。外宮相殿ふ坐ば天兒屋命と。太玉命の御靈形の事を。舊記云。右二座。天兒屋命靈形笏坐賢木二枝坐天石戸開之時。天兒屋命捧持祝詞敬拜鎮坐笏賢木是也。太玉命靈形。瑞八坂瓊之曲玉奉藏圓筥云。亦五百箇御統玉奉懸眞賢木枝也云。天岩戸開之時。太玉命捧持寶玉是也。玉串內人奉仕眞賢木五百箇御統玉之緣是也。と見とる。疑ふく古傳と聞え多ひ。此とと。御鎮座次第記ふも見とる。を。大ら海世の古学にる輩かゝる書ふ見とる事をバ取ざる字見とこの紀事ふ心得とは先まど。中くふ思慮の委

ら。ぬものぞ。熟く故実ふ合せ考へて。実の旨を得とむ人は。自らふ悟べし。尤も中ふは。後人は加とりと所思る事も多ふる字。彼此異本を合せ。みまた元く集其餘の書ふ引とは。を。も校ば見て。疑ハしき事は省きて引とひ。かゝる事は。決めて傷はまじくまバあり。此を思ふ。も。是時ふ。神等は賢木を捧持ゝむこと。違有るはじく所思ひまと此傳ふ依て。も。玉串と云は。も。玉を著とは故ふ。云る稱ふる事も。此傳ふて灼焉し。ふ。ひ。又第五十四段。木くを合くとは。ふる処ふ注ふ說をも。合せ考ふべし。○天櫛明玉命。天豐玉命。天明玉命。天羽明玉命。玉祖命。名義とひ總て云べし。櫛ハ借字ふて。奇ふゆ。豐は美稱辭ふひ。羽は師說ふ。映ふて。照曜くを云ゆりとは。玉祖命は。此も師說ふ。和名抄ふ。河內國高安郡。また周防國佐

波郡ある郷名の王祖を多末乃於也と云るを書紀ふ王屋命と書ふをを合せて多麻能夜を訓べし。於を省くて常ふる中ふ此ハ乃ふ於の韻あをバ更ふり故書紀ふて屋字を書りさるを王祖と書る例をも見合さて多麻夜と訓るて誤ふり名義て字ハ如しと云ひ。○出雲国忌部忌王作師説ふ書紀ふ王作上祖王屋命王作をタヽスリと訓て已ろし。と見えまと王作部と云ひ。王作部垂仁紀ふも見也古事記の彼巻ふて王作人とあり。はと仁賢巻ふ難波王作部鯽魚女と云人見也。今も難波ふ王造と云ふ地名あり。大殿祭祝詞ふ齋王作等我持齋波利持淨麻波利造仕禮留瑞八尺瓊能御吹支乃五百都御統乃王云く。今云フキとホキと同言ふるこを御誓の処ふ云へりき。古語拾遺ふ櫛明王命出雲国王作祖也まと神武御代の所ふ櫛明王命之孫造御祈王古語美保伎王言祈祷也其裔今在出雲国毎年與調物貢進其王此て臨時祭式ふ出雲国造奏神寿詞と云ふる時獻る物の中ふ王六十八枚云くと見えて彼詞ふ此王の事見えまと同式ふ凡出雲国所進御富岐王六十連云云毎年十月以前令意宇郡神戸王作氏造備差使進上と見也拾遺ふ毎年貢進と云ふるも大殿祭詞ふ云ふるも是ふ式ふ出雲国意宇郡王作湯神社今云此社て貞観十三年十一月授出雲国正五位上湯神從四位下也国史ふ見也出雲風土記ふ忌部神戸国造神吉詞奏参向朝廷時御沐之忌里故云忌部郎川辺出湯方病悉除自古至今無不得験故俗人曰神湯也と見え和名抄ふ忌部郷あり今俗ふ王作町湯町といふをぞ風土記ふ同郡ふ王作川と云も云ひ。今云まと王作山といふも同郡ふぞ。まと式ふ近江国伊香郡王作神社和名抄ふ陸奥国王造太万都久里郡駿河国駿河郡王造多万都久里土佐国安藝郡王

造。多万都久利。姓氏錄右京天神ふ。忌王作高魂命孫天明王命之後也。天津彦火瓊〻杵尊降幸於葦原中國時與五氏神部陪從皇孫降來是時造作玉璧以爲神幣故號玉祖連亦號玉作連。此外ふも續紀九八ふ王作金弓世二ふ遠江國城飼郡主帳王作部廣公ふど云人も見えさり。さて又号王祖連亦号王作連と云ぞ。王作連と云と。二色ある由ふり。王祖連を亦王作連とも云と謂ふれ非ば。○王祖連師云。右れ書どもふれみふ王作とれみ有りて。王祖と云ふとれ見えざるふ古事記ふ。王祖連と舉げ。書紀ふも天武卷十三年十二月王祖連賜姓曰宿禰ぞ。ふるれ。此氏本ハみふ王作と云ハれをや後ふ。祖〻の御名を取て。王祖とれ改称られと。ふ。

ぼし。姓氏錄右京天神ふ。王祖宿禰高御年須比乃命十三世孫。大荒木命之後也。まと河内國天神ふ。王祖宿禰天高御魂乃命十三世孫建荒木命之後也。おきらふ祖神王祖命を舉ば。れ此人の時ふ中ごろ家門を興せしふるべし。然れど王作を王祖と改称られしも此人の時れどふや有ハれ。仁賢紀ふ王作部鄭魚女ぞ生る子ふ。麁寸ぞ云あり。さきど其父れ山ずとありて。姓れ見えば。式ふ大和國宇智郡荒木神社あり。大荒木森と云ハ是ふり。さて兵範記の久安五年の処ふ。木工允王祖親宗と云人見えさり。後世ハ此姓れ人絶ぬられし。式ふ。河内國高安郡王祖神社。今云これ社れ今神立村と云ふ在て高安明神と云ぞし帳考ふ云り。和名抄ふ。同郡王祖多末乃於也郷。まと式ふ。周防國佐婆郡王祖神社二座。貞觀九年二月。周防國從四位下王祖神從三位と。國史ふ見え。日本紀畧康保元年四月授周防國坐正二位

王祖神縱一位○今云此社は今大崎と云ふ在抄ふ同郡
て俗ふ王祖と云當國一宮ありと帳考ふ云り
王祖多万乃於也 郷の卍と云まを妃ちて興田吉從云式ふ阿波
國名方郡天石門別豊玉比賣神社あ卍此は神代紀石屋
戸段の一書ふ王作部遠祖豊玉者作玉と云の卍此神を祀
れる社ふるぢし石戸を開ぁ乃へる時の物を作きる神
ふまぢ石門別と云べしと云卍此考然も有べくおぞも
依由ての其は此神を女神ふる由傳とるは神名祕
書ふ櫛明玉命高皇産靈神女拷幡千々姫命之妹也と云
る說も古傳も有しを取て書るれらむと思は依くふ合
せて御鎮座本記ふ太玉命櫛明玉命兄也をも有ふ依て

深く考ふるふ彼天石門別豊玉比賣神社は式ふ同郡ふ
並て天石門別八倉比賣神社の卍て當國の神社帳ふ二
社ともふ名東郡名方郡寛平八年ふ名東名西と二郡ふおきり 佐那河内村と
云ふ在て二社を都て今も天磐戸別社といふ由見えて
此天石門別八倉比賣神と申は第百三十四段天手力男神者坐于
佐那縣と云る処 ふ云る如く拷幡千々比賣命ふるぢく思も依
ふ此豊玉比賣神社のそれふ並て共ふ天石門別と申は
こと千々比賣命之孫也と云るふ熟符ひ其は拷幡千々比賣命の伊勢
佐那縣ふ坐ぢ阿波國の八倉比賣神社の在所をも佐那と云を思ふべし はと富久てふ言
はもを玉祇以て壽を卍出と依事れる由は上第三十六段 ふ

云るゞ如くふて。神壽詞に。王を主として壽賀とる詞ふれど。必王作氏に仕奉るばき事れるを。然に非で出雲氏の仕奉るおと不審おく。故考るふ。此に女神の裔に謂ふ依て。此事を仕奉ゞてふ。出雲国造の。替ゞて仕奉例とおれ例ふに非ざ例ふ。彼諸国ゞれ舊家をり進る種くの物に。各く某くの家くより進れる例と見もるを。王作の王を進るれみに。式ふ出雲国所進御富岐王六十連云く。令王作氏造備差使進上と云るをも思ふべし。ちて此氏の本家は。女を主として。猿女桂女伊勢織女ふど此例に如く在し故ふ其裔のむげふ少況も此故ふやまと仁賢天皇紀ふ見とる王作部鄭魚女ゞ子ふ。麁寸と云は。決免て姓氏錄ふ。大荒木命まと建荒木とも。はゑ大荒田を女

いふふて。おれ王祖氏の祖外ゞれむを。鄭魚女ゞ子と云て。其父なゞ多ゞ住道人山寸と云て。姓の見ざ例も。母に鄭魚女を主と爲ゞる故ゞぞ有べきはと櫛明王命ハ。拷幡千く比賣命に妹ふゞと云傳ふ依て。思ひ合ばき事ゞ。そに神名祕書ふ太王命。高皇產靈神子。拷幡千く姫命。弟櫛明王命兄也と云るは。正しき古傳とおゞえとゞ。然云ふ故に下第三十五段。ふ云如く。太王命を云名に。王を著と例賢木を捧とるをゆ負例名ふて。まと太王命の名義に考師說と異ふり。其に手向ふ太と云称言にいかゞおきバふり。猶下ふ云を見を。姓氏錄ふ。天櫛王命とゞるも。同神外例ふ合せて。神名式ふ。大和国添下郡ふ。久志王

比古神社なりて。此等の事委くは第六十一段太王命に処ふ云べし。廣瀨郡ふ櫛王比女命神社あり。おれ社ハ今辨天村と云ふ在て辨才天と云とぞまた伊豫国風早郡ふも櫛王比賣神社なりて齊衡元年三月従五位下を授奉給へり此も同神なるべし。おれ櫛王比古。櫛王比女と兄弟對ひあふ名ふて。兄弟同名を比古比女と對へ言る例いと多

り。おれ太王命豐王命の社なるばし。猶言はゞ下ふ云ふ如く彼賢木ふ玉を著さるを玉もて祝を主と爲ふるふれど其を造き奉神社おゐき奉ふ與るばきふ然て非て太王命の掌せることを。太手襷取懸てと云ひ根掘ふ爲ふ依榊ふるれど我思ふふ甚く力れ入る事ふて女神のもれし難き事ふ依故ふ御兄の替りてものし給ふる

ふるばし。彼出雲国造ゞ玉を奉りて神寿詞を奏ひおとも此謂ふ依る事ふらむ。また神代紀ふ忌部遠祖太王者造幣玉作部遠祖豊玉者造玉といひ姓氏録ふ天明王命云く造作玉璧以爲神幣と云るも何とゝや由有て聞もるをも思ふべし。かゝまた姓氏録ふ高魂命孫天明王命を云るは傳の錯ふて。太王命れ御兄ふ違なるはじくおそ。また書紀一書ふ伊弉諾尊兄天明王をなるれども殊ふ甚じ紀誤ふりれり。

○門人竹村ふ樹。樋口光信。岩崎長世等いふ。おれ古史傳の十ま紀といふ巻を。かく印本ふふし紀ふた。三栗の中ふ山道中津川のうはやふ家をる眞ゑげをし菅井れ子光高ちて間秀矩い同じ心ふ紀と米ふふ。

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan